

---

**ただし、使うとズボンが濡れる。**

鳳凰院凶魔（笑）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ただし、使うとズボンが濡れる。

### 【Nコード】

N3767S

### 【作者名】

鳳凰院凶魔（笑）

### 【あらすじ】

気がつけば異世界。無職25歳、田中一ががんばるお話。

人と出会い、色々思い、考え、挫折し、努力し、成長する物語

…にしたいと思っています。

テンプレですが、楽しんでくれる人がいますと、嬉しい限りです。

亀更新（予定）初めての作品で、色々とおかしな点が出てくると思います。ほぼどのご注意などよろしく願います。

## 冒険一日目

「おめでとうございます。これでハジメ様はランクDにアップしました」

受付嬢のお姉さんが営業スマイルを浮かべ、ランクが上がったことを告げる。

俗に言う「冒険者」を始めることになり、苦節三ヶ月。この世界、「エデン」に来てから約半年目のことだった。

「報酬はギルドカードに振り込んでおきます。早速新しい依頼を受けますか？」

「いや、やめておきます。今日はゆっくり休みたいので」

お疲れ様でした、という受付嬢の声を背に、ハジメはギルドから出る。時間的にはまだお昼過ぎだからか、街は人で溢れ返っている。あちこちから威勢のいい呼び込みの声が聞こえる。

「ランクDか…。」

そう呟きながら、自分のギルドカードを見る。そこには、日本語ではない文字で名前とギルドランクが書かれている。

ハジメ「タナカ D

銅を原料にしたのかと思われる茶色のカード、ここでの身分証も兼ねている。言葉は通じるのに文字が読めないのはこの世界に来たときから変わらない。日常会話程度ならなんとか読めるように勉強をしてきた。

「そろそろお金も溜まってきたし…村に一旦戻ろうかな…」

適当な店に入り、お昼を済ませながらハジメは考えていた。この世界にいつの間にかたどり着き、路頭に迷っていたところを偶然が重なりお世話になることになった村。小さな村だが、ハジメにとっては恩のある村だった。

「よし、ランクDの依頼つてのを受けて、それから村に帰ろう」

そう結論を出し、ハジメは来た道を戻る。先ほどより少し人が少なくなつたギルドに入り、依頼掲示板を見る。そこにはランクEからBまでの依頼が壁一面に張り出されている。

ランクA以上の依頼はその町のギルド長の下にあり、依頼達成ができる者にしか依頼されないという。

「ん…ここはやっぱり街の中の依頼を受けたいんだが…討伐系は危険だしな」

なるべく安全な依頼を探す、討伐系以外見当たらぬ。ハジメはランクEの頃から、比較的安全性の高い町での雑務を多く受けてきた。

「この世界では命の危険が常に傍にある」

これが、この半年で学んだことである。地球とは違う。日本とは違う。そんな世界に来てしまったのだ。

仕方ない、と一枚の依頼を受けることにする。壁から紙をはずし、

受付に持っていく。先ほどあった受付嬢がいつもの営業スマイルで応対する。

「ランクD、ゴブリン討伐ですね。補足情報ですが、一体ゴブリンリーダーを見たという情報があります。リーダーは必ず討伐してください。よろしいでしょうか？」

ゴブリン自体はランクEの冒険者でも討伐可能なモンスターであるが、リーダーがいると、徒党を組み、群れる。そうになると少し厄介になる。ランクEの冒険者：かけだしではつらくなるので、ランクDに位置されている。

ハジメはゴブリンやゴブリンリーダーと戦うのは初めてではなかった。まだ冒険者になる前、村にいた頃に一度村人と一緒に戦っているのだ。あの頃の自分よりは強くなったからいけるだろう、と判断し依頼を受ける。

「時間を掛けるほど依頼達成が困難になる恐れがありますので、できるだけ早く処理をお願いします」

「わかりました。今から準備して行ってきます」

「お待ちください。僭越ながら申し上げますが、ハジメ様は今日ランクEの依頼をこなしたばかりです。今日一日はしっかりと休んで、明日以降任務を行ってください。そのほうがハジメ様の生存率が上がります。」

思わぬ提案に一瞬ハジメはポカンとするが、受付嬢の営業スマイルとは違った微笑に、はい、としか答えられなかった。

ギルドを出て、今日一日掛けて準備をするか、と道具屋に向かうとしたところで、ハジメに声を掛けてくる大男がいた。

「よう！景気はどうだ！ハジメ！ガハハハハ」

二メートルはある長身、それに見合うだけのがっしりした体格、背中にはハジメほどの大きさはゆうにある巨大な斧。しかし顔は愛らしい熊。獣人族のバルカンだった。

「バルカン…ランクがやっとDに上がったとき。バルカンこそ…仕事上がりか？」

「ガハハハ！ああ！ちょっと人食い熊をな！このワシが熊退治なんぞ！笑えるだろ！ガハハハ！」

人食い熊（ストーンベアー）…ランクB以上の依頼で見かけるモンスター、岩の様に硬い皮膚を持ちながら素早い動きで人を襲う害獣である。

「さすが『旋風』ともなると、ギャグにキレがあるな」

ランクがBにもなつてくると、異名や二つ名をつけられてきたりする。巨大な斧を振り回しながら敵を圧倒するバルカンにぴったりな二つ名だと、ハジメは思っているのだが。

「ガハハハ！やめろい！そんなこっばすかしい呼び方は！」

少し嬉しいのか耳がピコピコしてるのが外見に似合わず可愛い。

「俺は明日ちょっとゴブリン退治だな。今から準備さ」

「ガハハ！そうか！ゴブリンといえども油断は禁物だな！まあ、主ならば問題ないだろう！ガハハハハ！でわな！今度飯でもいこうぞ！！ガハハハハ！」

のつしのつしとギルドに向かっていくバルカン。冒険者になって一月ほどのころ、森でバルカンとは出会った。詳しくは、見たことないモンスター二体と戦闘中のバルカンと、安全と思って近くの森に薬草を取りに來ただけのハジメが出会った。

そのモンスター一体がこっちに気づいて、襲い掛かってきたので全力で後ろに後退したが、それでも襲ってくるので、誰もいないことを確認しつつ、仕方なしに、本当に仕方なしに魔法を使って倒す。ずいぶんあっさり倒れたことから、ランクCあたりのモンスターかと思い、その後さっきの場所にもどると、斧で倒したのであろう同じモンスターとバルカンを発見する。さっきのモンスターは、と尋ねられたので、倒したと答えたハジメに少々の驚きの表情で表したバルカン。街に戻るまでには二人は打ち解け、夕食を共にする仲になっていた。その後からか、バルカンが無駄にハジメのことを買う様になったのは。当時ハジメはランクE、バルカンはランクBに届きそうなくといったところで、ランクCあたりのモンスターをランクEのハジメが倒したことを買っているのかと思い、特にハジメは何もいわなかった。魔法のことは内緒にしておきたかったのである。

「エデン」では魔法は存在する。千人に一人ほど、魔力を持って生まれる子供がいる。その力の大小はあるが、一般的に魔道士、魔法使いと呼ばれ、ギルドに所属していたのなら、最低でもランクC程度のモンスターなら倒すことができる。魔力を持つものの多くは城に使えたり冒険者をしているが、魔法には条件があった。その条件は人によったり、魔法の属性によって変わるが、ほとんどの人は「魔力を消費する」である。中には、魔力消費が少ない代わりに「寿命を削る」という人もいたり、本当に珍しい人だと、「使うたびに髪の毛が減り、髪の毛の数だけ魔法が使える」という人もいたりするという。この世界では「神の悪戯」と呼ばれる現象であった。

話は変わるが、このハジメという男、そんなに口数が多いことも

ないが、それなりにプライドの高いところがある。理系で、運動は苦手、といったところか。しかし、ギルドでは剣士として通している。なぜか。

この世界に来てしばらくたったとき、ある事件を境にハジメは魔法を使えるようになった。しかも魔力消費は限りなく少ない。ハジメ自身に膨大な魔力があるわけではないが、消費が限りなく少ないことを見ると、これはすごいことである。しかし、魔法条件、「神の悪戯」により、プライドの高いハジメは、初めて魔法を使って以来人前で魔法を使うことは滅多なことでもない限り無い。

ハジメの魔法条件。それは、「使うと、ズボンの股間の辺りが濡れる」というものであった。



## 冒険一日目（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。  
感想等がありましたら、よろしく願います。

## 冒険二日目（前書き）

サブタイトルなんですけど、一話二話のことで、実際の物語の日数とは関係ありません。

## 冒険二日目

ゴブリン退治の準備を終え、宿に帰る頃には夜になっていた。ベツドに入り、明日に備えて休むこととする。その晩、ハジメはこの世界に來たときの夢を見る。

「は？」

「エデン」での第一声である。

金無し、定職なし、彼女無し。見事に三拍子そろった25歳、それが田中一であった。

残り少ない金で派遣の仕事をこなしつつ、親のスネをかじりつつ生きてきた一、一応定職に就こうと探してはいるものの、妙なプライドが道を阻め、就ける仕事にも就けずにいた。

なんとか面接までこぎつけた仕事が見つかったのは三日前、履歴書やその他諸々を買い込むために百円均一のお店に出かけた帰り。まさに玄関の扉を開け靴を脱ごうとして足元が草になっていることに気がつく。

「え？あれ？」

確かに玄関を開けたよな、と思い振り向く。そこに扉はなく、ただただ森が広がるだけだった。

まったく何が起こったのか判らない状況に、一は混乱するが、十分ほどすると周りを見渡す程度の冷静さを取り戻した。

「そつだ携帯！」

ポケットから携帯を取り出し、誰かに連絡を取ろうとするが、電波を受信していなかった。その場にへたり込む。手には百円均一で買った菓子パンとジュース、カッターにボールペン、履歴書、自販機で買ったタバコが入っている袋、ポケットにはライターと財布があるだけだった。

ギャツギャツギャ…と遠くで何かの泣き声がする。鳥だろうか、日本には狼なんかはいないけど、熊ならいる。今出会うと死ぬかもしれないと思つた一は、とりあえず身を隠せる場所を探そうと動くことにした。

周りを警戒しつつ森を進む。巨大な木々が当たり一面に広がっており、前に進んでいるのか、後ろ意進んでいるのかまったくわからない状況。木漏れ日からまだ日が昇っていることは判るが、あたりは薄暗い。

どれくらい歩いたのか、目の前に道らしき跡があった。獣道のような感じもするが、あきらかに人の手がいっている。この道を進めば人に出会えるかもしれない。希望が見えた一の足取りは軽くなる。それからしばらくすると一本の巨大な木があった。巨大な、あまりにも巨大な木。幅だけでも三十メートルはあるだろうか。真ん中には人が入れそうな穴があり、奥は見えない。警戒しつつも、一は穴に入る。

「獣臭はしないし…今日はここで休むか…」

あたりの暗さが増したことで、穴の中で野宿することを決める。穴の中は六畳ほどの広さがあった。本当にただの空洞で、地面も砂だった。

そこらに落ちている枯木を拾い、穴の外で燃やす。履歴書に火をつけて種火にした。

いつ食料や水にありつけるともわからないーは、ちよつとだけパンを食べ、ジュースを飲んだ。

入り口付近に火を持ってきて穴の中に入る。どのくらい歩いたのかわからないが、疲れていたせいも、直ぐに睡魔は襲ってきた。朝起きたとき、自分の部屋で起きることを期待して。

次の日、起きるとやはり穴の中だった。

「マジかよ……」

落ち込んだものの、携帯で時間を確認すると、八時十分になっており、電波は相変わらずなかった。

外は昨日よりも明るく、幻想的な森を照らしていた。

昨日見つけた獣道は太陽の方に向かってあり、一はその方角に進んでいく。三時間ほど休憩を挟みながらも歩いただろうか、遠くの方で何か音が聞こえた。それは聞き取れない外国語のような音に聞こえた。木の陰に隠れながら音のする方を伺うと、そこには見たことのない生物、否、見たことはあるが、現実には存在しないはずの生物がいた。

ゴブリン…ゲームなどにより見た目は少々異なったりするが、まさしくゴブリンがそこにはいた。数にして三体。メールアドレスないくらいだろうか。三体は顔を向かい合って、会話をしているようだが言葉が聞き取れない。

生唾をゴクリと飲む音だけがーには聞こえる。なんだこれは？夢

か？と自問自答を繰り返す。焦りが不幸を呼んだのか、ゴブリンの一体と目が合う。

「ギギャー……！」

こちらを指差し、腰に差していた錆びた刃物らしきものを取り出す。三体は同時にこちらに走ってきた。

「ひっ…っ」

背を向けて走る。初めて浴びる殺気に恐怖しながら、しかし、死にたくない一心で。あれらは己を殺しに来ている。ゲームやアニメではない。現実なのだ。

死にたくない一心で全力逃走を試みるが、これまでまともな運動をしたことのない一の体力は直ぐに尽きた。幸い運動の苦手な一でも振り切ることができたのか、後ろにゴブリンの気配はない。

「はあ…はあ…はあ…」

息も絶え絶えに、木に座り込む。先ほどの恐怖が頭をかすめ、自分の体を恐怖で押しつぶされないように抱く。

怖い…

なんで俺が…

ここはどこなんだ…

昨日から怒る分からないことだらけの事態に、誰にぶつけていい

のかわからない怒りが、恐怖を通り超え爆発する。

「やってやる…こうなったら…あいつらを…殺られる前に殺るんだ…」

この時、一は少し混乱していたのかもしれない。心のどこかで、まだこれが現実のことではないと、夢の世界のことなのだと考えていた。

足元に落ちていた一メートルほどの枝を拾いあげる。見よう見まねで剣道の構えをとり、一振り。重くなく、軽くなく、ヒュンと木の枝は弧を描く。

「ははっ…初期武器はひのきの棒か…」

自嘲気味に呟き、来た道に戻る。ゴブリンを探すのだ。

ポケットにはカッターナイフを入れ、残りの物が入った袋はジープのベルトに縛りつけた。ゆっくり、気配を殺すように進んでいく。

やたらと喉が渴く。ジュースを一口飲もうかと思ったとき、ゴブリンが二十メートル先に見えた。こちらには気づいていない上、一体だけだった。

千載一遇のチャンス。一は覚悟を決め、ゆっくりと、後ろから近づく。ゲームと同じなんだと自分に言い聞かせながら。

「あああああああ！！！！」

気合の叫びとともにゴブリンの頭に向かって木を振り下ろす。全力で振った木はゴブリンの頭を捕らえ、嫌な手ごたえとともに半分に折れた。

「あああああ！！！！」

半分になった木の棒でなんども殴る。絶命の声はなかった。返り血を浴びたところで我に返った一は暗い笑いを浮かべた。

「ははっ…なんだ…こいつら弱いな…」

熱いと感じたのはその瞬間だった。左の二の腕が異様に熱い。否、熱いのではない、痛いのだ。

「があ…！」

叫びながらもその場から慌てて離れる。振り返ると、自分の血がついた凶器を構えたゴブリンが一体、まるで笑っているかのように叫んでいた。

「くそっ…」

痛みで頭がいっぱいになるが、今は目の前の敵を殺すことだけを考えて。木の棒は無い。逃げるときに倒したゴブリンの近くにおいたきたのだ。

ポケットにあるカッターを思い出して取り出す。カチカチと、刃を半分ほど出し、ゴブリンに向けた。

ギャツギャと奇声を上げながらゴブリンが突っ込んでくる。そんなに早くない。避けられると思い、避けようとするも身体が思うように動かない。刺された痛み、ショック、初めての戦闘で身体が硬直していたのだ。

紙一重で避けることに成功するも、服と腹の皮一枚を切られる。



二の腕の痛み比べたらそれほどでもないダメージだったが、一は怯む。

どうすればいい。どうすればゴブリンを屠れるのか。お互いの得物は同じような大きさ。なら、使い手によって勝敗は決まる。

先に動いたのはまたもゴブリンだった。相変わらず同じ動きで一を殺しにくる。今度は避けることが出来た一は、地面の砂を握り相手に投げつける。それがうまいこと目に入ったのか叫びながら目をこするゴブリン。この好機を逃さないと一は後ろに回り、背中を切りつけた。

百円均一のカッターとはいえ、なんの抵抗もなく振りぬくことができた。

「ギャアアアア」

ゴブリンが叫ぶとヨタヨタと一に背を向け倒れる。しばらくそれを見続け、ゴブリンがちゃんと死んでいることを確認した一は、吐いた。ほとんど胃液だったが、痛みが現実を呼び戻し、生物を殺したことに吐いた。

しばらくボーッとしていたが、先ほどの戦闘で仲間が来るかもしれないと思った一は、どこに進んでいるかもわからないまま歩いていった。

### 冒険三回目（前書き）

投稿二話目でお気に入り一件とポイントがあるのを見て、がらにもなくにやけてしまいました。すごく励みになります。ありがとうございます。

ちょっと過去話が長くなりそうですが、お付き合いください。

## 冒険三日目

カッターで服を切り、へそだしTシャツを作る。残った布で傷口をきつく結ぶ。痛む二の腕を押さえるようにしていつ抜けるかも判らない森を歩く。思っていたよりも時間がたっていたようであたりは暗くなってきた。

急いで森を抜きたい一だが、夜ゴブリンにであつたときのことを考えると、どこかに身を隠しておきたい気持ちになる。他のモンスターがいらないとも限らない。

「くそっ…破傷風とかにならんだろうな…」

刺されたナイフの様な刃物は少なくとも綺麗な物ではなかった。痛みその他に熱を帯びてきている。手当てが遅れると傷口が腐ってしまふことも考えられる。

不幸に次ぐ不幸を体感した一に、希望の音が聞こえてくる。水の流れる音がするのだ。疲労困憊だった身体は急に元気になり、音に向かって歩く。

「み…水だ…」

小さな川である。岩から染み出した水が川を作り出していた。ここに来るまでに飲みつくしたジュースのペットボトルで水を汲む。生水は危ないという話も聞いたことあるが、今の一には関係なかった。

ペットボトル一杯に入った水を一気に飲む。その味はこれまで飲んだことのない水のおいしさを感じた。

「く…俺は…水なんかで…泣いてるのかよ…だせえ…」

いつのまにか頬を伝うのは涙。痛みではない。生き延びたことがそうさせたのだ。

水を飲んで満足した次は傷口を洗い流す。丹念に洗い流し、巻いていたシャツも綺麗に洗い巻きなおす。痛みは治まってきたが、動かすと激痛が走る。思ったよりも深いようだった。

一には一つの希望が見えていた。川である。川沿いに歩いていけばきっと人里にでると。以前読んだ漫画だったのか、雑誌だったのかは覚えていないが、そんな情報が書いてあった。しかし、今日はもう暗い、明日から川沿いにあるくことにした。そうなると寝床の確保だが、水を飲んで休んでいた一に動く気力などは無く、木にもたれかかるようにして眠ってしまった。

水の流れる音で目が覚める。目を空けた瞬間周りを確認する。無事生きていたことに安堵するも、自分の失態に悪態をつく。危険な生物がいたら？毒をもった虫がいたのかもしれない。そんな中、無防備に寝ていたのだ。昨日のこと、今も痛む二の腕の傷、これが現実であることを嫌というほど認識していたはずなのに。もっと気を引き締めようと立ち上がったところで身体が重いことに気がつく。

「やつぱりか…」

熱が出ていた。原因はわかりきっていた。とりあえず川で顔を洗い、傷口を洗い、シャツを巻きなおした。身体は重いが、希望が見えてきたのだ。川沿いに歩けばきっと人里にでる。それを信じて一は歩き出す。

一時間も歩くと、それなりに川は大きくなってきた。しかし、息

が上がっていた。昨日は三時間ほどあるいても今より疲れてはいなかった。

「熱って…本当に…体力…なくなるんだな…」

荒い息を上げながら誰ともなく呟く。熱を出したときにこんなに歩いたことのなかった一は思った。これまでは薬を飲んで寝てれば治っていたのだ。

もう少し歩いたら休憩しようかと思い、だるい身体を引きずるように歩いていると、川で何かが跳ねた。一瞬警戒するが、それが魚らしきものとわかると、一は喜ぶ。魚はちゃんと魚の形をしていて目を凝らすと結構泳いでいた。この三日間を菓子パン一つで過ごし、空腹は限界だったのだ。しかし釣り道具などあるわけでもなく、どうしたもんかと考える。

「なんだっけ？がちんこ漁…だったかな…」

岩に岩をぶつけ、その振動で魚を気絶させる日本では禁止されている漁法である。川を見るが岩はないので、岩を探してうろついていると手ごろな大きさの岩がある。少ない体力で川傍まで持つて行き、ズボンを脱ぎ川に入る。膝まである水かさにちよつと驚くが、川の真ん中あたりまで持つて行きその場を離れる。しばらくじつとしていると、岩の周りに魚が集まるのが見えた。もう一つ岩を探してきた一は、十キロはあると思われる岩を持ち上げ投げる。数瞬、大きな音と水しぶきが起こる。水面が落ち着くのを待っていると、何匹か魚が浮いていた。嬉々として魚を取り、よく洗ったカッターでハラワタを出し、履歴書をまた一枚燃やし、焚き火を起こして魚を焼いた。

塩も何も掛けていない魚の丸焼きを三匹ほど食べ、残った二匹を

袋に入れ、ペットボトルはポケットにねじ込んだ。休憩もいれ、満腹になった一はまた歩き始めた。

二時間ほど歩いただろうか、体調は悪化をたどる一方だった。息が荒くなり、足取りも怪しくなってくる。朦朧としながらも歩いてみると、悲鳴が聞こえた。ここからそう遠くない場所です。

三日ぶりに聞く人の声に喜びを隠し切れない一はその場所に向かつて走り出す。朦朧とした意識ではその声が悲鳴だったということを考えるにいたらなかった。

## side とある母親 -

熱がある娘に食べさせるために、果実を取りに森の浅いところまで来たある母親がいた。そのついでに、熱を下げる効能のある薬草を摘んでいたことだった。この森の浅いところなら、魔物はおろか、ゴブリンすら出ることはなかった。…はずだった。

前の茂みからガサガサと音をだしながら出てきたのは、ゴブリンではなく、もつと絶望に近い魔物であった。

マンティス：巨大な鎌を武器に襲ってくるカマキリである。それに硬い皮膚を持つ、肉食の魔物。ただのカマキリなら怖くはないが、その大きさは人間大であった。キチキチと声のような音をあげながら、じりじりと母親ににじり寄ってくる。ゴブリンなら背を向けて走れば逃げたかもしれない。しかし、大きさの割に意外と機敏なマンティスに背を向ければ背中から切られる。先ほどあげた悲鳴を村の人が聞きつけ、助けに来てくれることを祈るしかないのだが、浅い森とはいえ村までの距離はある。その可能性は少ないだろう。

恐怖のあまり、抜けそうになる腰をなんとか奮い立たせ、ゆつくりとマンティスに視線を置きながら後退する。そこで気がついた。マンティスは手負いだったのだ。頭に二つついている触角は折れ、自慢の鎌は片腕しかなかった。どこかで冒険者にやられたのか、仲間内でなにかあったのか、いずれにせよ向こうも弱っていることは確かだった。

しかし、それが判ったところで、母親にはどうすることもできなかった。後ろを見ずに後退していたせいか、トンつと木にぶつかってしまふ。マンティスとの距離はだんだん無くなって来る。とうとうあと一歩という距離まで追い詰められ、その片腕の鎌を振り上げた瞬間、パキンという音とともにマンティスの首が飛んだのだった。

- side out -

悲鳴を聞いて、人の声だと喜び勇んで駆けつけてみると、巨大なモンスターがいた。後姿で確証はないが、人間の大きさもある力マキリだった。そこでようやく悲鳴だったなと思い立ち、その先の女性を見る。

人だ。ただ、外国人なのか金髪の髪が見えた。え？ここ外国？と考えているうちにその女性は木を背にし追い詰められていた。まずいと思ったときにはもう駆け出していた。ポケットに入っている力ツターの刃を全部出し、首らしき箇所を狙う。一番細かったからだ。

鋭い刃物だったことが幸いした。熱で声を出すのもきつかったことが幸いした。手負いで触覚が折れていたことが幸いした。いくつもの偶然が重なり、本来ならランクCに位置する魔物マンティスは絶

命の声をあげることなくそのまま倒れた。

倒れたマンティスに視線をやり、それから折れたカッターを見て、最後に驚く女性を見て、一は意識を失った。



## 冒険四日目

- side とある母親 -

目の前で青年が倒れて行く。マンティスの首が飛ぶところから、青年が倒れるまで瞬きすらしなかった女性は、どさつという音にはつとする。呼吸が荒く、包帯らしき箇所からは血が滲んでいる。

「いけないわ…誰かを呼びに…」

と思ったところで、マンティスの屍骸が目につく。まだ仲間がいるかもしれないと思うと、この命の恩人をおいて村まで助けを呼びに行くことなどできず、母親は困っていた。結局、青年の肩を抱き、二厘三脚のような形で引きずるように歩く。幸い青年は男性にしては線が細かったので、女性でもなんとか運ぶことができた。

しばらく歩き続け、遠くに村の入り口が見えたとき、異変に気づいた村の人が数名駆けつけてきた。

「どうした！イリス！」

そうやって声を掛けてきたのはイリスと呼ばれた母親の昔なじみであるアインであった。アインは村の警備担当で、この時間は門の警備だったようだ。

「魔物に襲われているところを助けてもらって…それよりもすごい熱があるの！早くカディナさんの所に！」

魔物に襲われたということに驚きもしたが、それよりも普段はお

つとりしているイリスの剣幕に、アインは慌てて青年を担いでカデイナの元に急いだ。それから慌しく治療が行われ、ことの始終を村の長老やカデイナ、アインに話したイリスは、しばらく青年の様子を見た後、カデイナに大丈夫だからといわれ、娘のことも心配なのでその場を去った。

家に帰ると、帰りの遅い母を心配したのか、熱がある娘がテーブルの上で眠っていた。娘を抱き上げ、ベッドに連れて行き、食事の準備をする。材料にとってきた薬草も加え、そろそろ料理が完成するころに娘が抱きついてきた。

「遅くなってごめんね？アリス…」

「ん…」

ぎゅっとしがみつく様に母親に抱きつく娘を、母は優しく抱きしめ、ご飯にすることをづけ、料理に戻った。

アリスはお皿を並べ、数分後にはおいしいご飯を満足そうに食べていた。もともとあまり話すほうではないアリスだが、食事のときに母親から魔物に襲われたことを聞くと、さすがに驚き慌てた。逆に襲われた母親はおつとりと「ほら、怪我もないわ」とのんびりしていた。

「でも」

と二人の優しい親子が心配したのは、傷つき、倒れた青年のことだった。

- side out -

目を開けると知っている天井だった。いつもの自分の部屋。母親がいつの間にか片付けたのだろうか、部屋は綺麗だった。何してたんだっけ？と思い、ああ、今日も特にすることはないんだった。といつもの日常だと思った。

「――！双葉！朝ごはんよー！」

母親の声が一階から響く。ずいぶん久しぶりに聞いたような気がするのは気のせいだろうか。わかった！と声をかけ、下に降りて行く。隣の部屋にいる妹の双葉が出てこないの、またゲームでもやってるんだろうなと思いリビングに向かう。すでに準備されている食卓に座ると、後ろから母親が双葉は？と声を掛けてきた。

「ああ…まだ部屋にいたと思うよ。ヘッドフォンしてゲームでもしてるんじゃないかな」

と母を見る。それは、醜悪な顔をしたゴブリンだった。

「ああああああああ！！！」

驚き、慌てて二階に駆け上がると、

「どっしたの？」

と双葉の声が聞こえる。しかしそこには、母と同じ顔をしたゴブリンがいた。

「あああああああ！」

絶叫とともに起き上がる。息が荒い。混乱する頭を、落ち着け、落ち着けと何度も心の中で繰り返す。夢だったのだ。しかし、しばらくはゴブリンの顔が脳裏から離れなかった。

「大丈夫かね？」

そう声を掛けてきたのは、四十台だろうかと思われる女性だった。明らかに日本人ではない顔立ちから数瞬思考が止まるが、聞こえてくるのは日本語だった。

「え？あ…はい」

しどろもどろで答えると、女性はニヤリと笑い、怖い夢でも見ていたのかい？ボーヤ。といってくるが、不思議と嫌味には聞こえず、ええ、まあ。と答えるまでだった。

「あたしや、カディナ。この村で医者 of 真似事なんかやっている。自分の名前を言えるかい？記憶がなくなっていたりは？」

「いいえ…記憶はあります。俺は…田中一といいます」

「そうかい。記憶はあるかい。そいつはよかった。にしても、タナカハジメ…変わった名前だね」

女性が勘違いをしていることにすぐに気がついた一は、名前がーで、苗字が田中であることを伝える。どうやらアメリカ風に苗字が前に来るらしい、ならばやはり海外なのか？と一は考える。玄関を開けると海外…なんだそりや。と自問自答していると、女性が話しかけてきた。

「じゃあハジメ、現状を伝えるよ。まずはイリスを助けてやってくれたそうだね。ありがとよ。危うくあの娘のパンケーキが食べられなくなるところだった」

イリスというのが、巨力マキリに追い詰められていた女性だと気づくと、ハジメは彼女が助かってよかった…と安堵した。

「いえ、あの女性が助かってよかったです。それにたぶん、俺も助けてもらったんでしょうし…」

治療された後が見える自分の身体を見て思う。あの場には彼女しかいなかった。彼女がきつと助けを呼んだりして自分を助けたのだらうと。

「よくそんな身体でマンティスなんて倒せたね？どこかのギルドに所属している冒険者かい？それよりもその傷、もう少しでやばかったね…腕がなくなるところだったよ」

と、物騒なことをいいつつも、ニヤリと笑う。おそらくはそれがデフォルトの笑い方なんだろうと決め付け、ハジメはまた思考の波に飲まれた。

マンティスというのはおそらくあの力マキリのことであらう。それにしてもギルド？冒険者？いったいななことだ？と、考えにふけっ

ていると、

「カディナさ〜ん、いませんか？」

という声が聞こえてきた。

「おやおや…噂をすれば…イリスが来たみたいだね。入っただけで！」

と玄関先にいるであろうイリスに声をかける。お邪魔しますという声と足音が聞こえてくる。あのとき助けた金髪の女性は、近くで見るととても綺麗な顔立ちだった。

「カディナさん、彼、目が」

といったところで、ハジメはイリスと目が合う。しばらく両者が止まっていると、さっき目が覚めてね、とカディナがイリスに伝える。

そうだ、お礼を言わなきゃ、と思っていたところに柔らかくていい匂いのする何かが身体を抱きしめた。

「え…ちょ…」

イリスがハジメを抱きしめていた。目には涙をため、抱きしめる腕は少し震えていた。涙声で、何度も良かった、と泣いており、それを聞いたハジメは、何も言えず、抱きしめ返すことも出来ず、ただ茫然としていた。

しばらくして、ニヤついて見ていたカディナがようやく助け舟を出す。

「ほらほら、イリス、彼が困っているぞ」

そう言われて、ああ！飛び退く。少し残念だったな、と思っていたと、それを見透かしたようにカディナがニヤついてくるので一瞬で直した。

「う…ごめんなさい。嬉しくて…」

と、まだ目に涙をためていうイリスはとても綺麗で、ときめいたのは秘密である。

互いに自己紹介をし、お礼合戦を始めたところでカディナが今日のところは、と、イリスを家に帰す。とりあえず二、三日はここで休めと言われ、ハジメは言葉に甘えることにした。考えることは山のようにある。それらを冷静に処理するために、カディナの好意はありがたかった。痛み止めや可能止めの薬を飲むと、程なく眠気が来てとりあえず身体を休めることにする。

次の日から情報を集めるために動く。といっても精々カディナやイリスとの会話をするだけであつた。本を見たのだが文字が読めなかった。アルファベットでもない文字で書かれたそれは、今まで見たことも無いものだった。

すっかり身体の調子も戻り、傷も痛むが行動に支障がないほど回復した。

これまで集めた情報を見ると、ここは日本ではなく、少なくとも地球ではないことが判つた。集まつた情報はすくないが、『魔法』というものが存在することを聞いたとき、それは確信に変わった。

『魔法』『魔物』、この世界に存在し、地球ではありえない空想の話。しかし、これが現実であることを嫌というほど知っているハジメは、納得するしかなかった。

果たして自分の世界に返れるのか、と悩む前にもっと切実な悩みが出来てしまった。カディナが、退院しても良いというのだ。治療費はいらないとまでいつてくれるのは大いに助かるのだが、この世

界のことをほとんど知らないハジメにとって、ここから出ることは大変厳しかった。かといってこの村にいきなり住めるものなのか考えていると、ちょうどイリスが見舞いにやってきた。彼女は毎日見舞いに来てくれていたのだ。

退院できることを告げると、彼女は自分のことの様に喜んだ。イリスに娘がいる話を聞いた昨日は驚きのあまり大声を上げてしまったが、目の前で無邪気に喜ぶイリスを見ると、とても人妻とは思えなかった。

お礼もしたいし、娘にも会ってと言われたので、悩むまでも無く好意を受けた。これで一泊考える時間が増える。と少し邪な考えもあった。カディナにお礼を言い、これからイリスの家に行くことを告げると、いつものニヤリとした顔で、

「元気になるやつがあるのだが…飲むかね青年」

と耳元で言われたので、丁重にお断りをした。



## 冒険五日目

「お…お邪魔します」

「はい、いらつしゃいませ」

程なくしてイリスの家についたハジメは、うやうやしくその玄関をくぐる。レンガと木材でできた家は、まるで中世の欧州のようだった。

娘を呼んでくるから、とハジメをテーブルに座らせ部屋を出て行くイリス。その姿を見送った後、ハジメはこれからことを考える。目標はもちろん日本に帰ること。その為の方針としてこの世界に来た原因を調べないといけない。しかし、この世界のことも知らず、先立つものすらないハジメには調べることができない。したがって、ハジメがすべきことはこの世界での生活手段を探すことであつた。

「この世界でも無職か…」

ポツリと呟く。日本でも無職、この世界でも無職。自分が情けなくなり、落ち込みそうになっていたときにイリスが帰ってくる。後ろには水色の長い髪を両端でくくっている可愛らしい子供が、母親に隠れるようにしてこちらを伺っていた。

「ハジメさんのおかげで熱もすっかり下がったの。娘のアリスよ。ほら、アリス」

「…アリス…です」

イリスに背中を押されながら前に出たアリスは、小さな声で名前を言つと、すぐにイリスの後ろに隠れてしまった。む、この年頃の娘はシャイなんだな、と無職の男は考え、

「こんにちは、アリス。お…私はハジメといいます」

この年頃の女の子とともに話したこともなく、なるべく丁寧な挨拶を心がけたハジメは出来るだけの笑顔を造って見せた。しかし、アリスの反応はいまいちで少し落ち込んだ。

「はい。それじゃ、お昼にしましょう」

嬉しそうにぱちつと手を合わせてイリスが言う。これ以上何を話したらいいんだと思っていたハジメは、助かったと思った。しかし、そう言って料理を作り始めたイリスとは別に、自分の向かいの席にちょこんと座るアリスがいた。

気まずい、これは非常に気まずいぞ。とハジメが冷や汗をたらしていたとき、やっと聞こえるような大きさの声でアリスが話しかけてくる。

「あの…」

それを言っただけ、しばらく俯いて話さない。それを見てイラッとするハジメではない。どうしたんだい？と優しく声をかけ、アリスが話すのをじっと待つ。時間にして三分程だろうか、じっと下を向いていたアリスが、意を決したようにこちらを向き、赤くなった顔で、小さな声で、しかし、はつきりとした口調で言う。

「お母さん…助けてくれて…ありがとう」

それはお礼の言葉。あまり人と話すことに慣れていないのか、アリスはまたすぐ下を向いてしまう。お礼を言われると思わなかったハジメは少し驚いたあと、今度は心からの笑顔で、

「うん、どういたしまして」

と、答えた。それから二人はぽつぽつと、料理ができるまで何気ない会話をしていた。

お昼をご馳走になり、熱こそ治ったが、まだ体力の戻らないアリスは部屋で休むといい、イリスと部屋を出た。一人になると、これからどうしようとまた考え始める。生きていくためにはやはりお金が必要である。地球でないこの世界で、財布の中の金は使うことはできないだろう。大学まででた学歴があるが、無職のハジメには特殊な技術があるわけでもなく、パソコンの無いこの世界では、彼の持っているスキルも活かせない。いかにしてお金を稼ぐか。そう悶々と悩んでいると、イリスが帰ってくる。

「ごめんなさい、アリスを寝かしつけていたの」

「いいえ、いいですよ」

食べてすぐ寝ると健康に悪いですよ、と思ったが、とりわけ言うことでもないと思い、胸のうちに隠した。

「アリスが知らない人とあんなに話すのは初めてのことだわ」

と嬉しそうに言う。あんなに話すといっても、ハジメにとってみればとても少ない会話であった。しかし、嬉しそうなイリスの顔を見ていると、本当にシャイな女の子なんだな、とアリスに対して思う。

「ハジメさんがあの時助けてくれなかったら、アリスとこうしてご飯を食べることもできなかったのね…ハジメさん本当に」

といったところで、ハジメはその言葉をさえぎる。このままではまたお礼合戦が始まってしまふからだ。

「ああ…あの、イリスさん、旦那さんはお仕事ですか」

そう聞いてみた。毎日見まいに来てくれてたときから思っていたことだが、旦那に悪いな、と。それを聴いた瞬間、ハジメは自分が地雷を踏んだことに気がつく。いつも笑顔でいたイリスの表情が少し悲しげになった。

「アリスは…私の娘ではないんです」

しまった。と、とっさに思ったハジメは慌てて誤ろうとするが、いいえ、と言葉を逆にさえぎられ、聞いてくださいとお願いされた。アリスは、イリスのお姉さん夫妻の娘であり、まだ赤子だったアリスを残して病で亡くなったこと、そのことをアリスは知っていることをハジメに告げた。しかし、娘を思い、薬を取りに行った母親、今、自分にお礼を言った娘。二人を見ている限り、お互いを思いやっている親子にしか見えない。そのことを伝えたと、少し赤くなつた顔で、先ほどとは違ったありがとうを言われた。

「ハジメさんは、どこから来たんですか」

来た、来てしまった。この質問が。心の中でハジメは悩む。本当のことを話すべきなのか、と。

あまりかみ合わない日常会話をしていたときにされたこの質問、入院していたときは、ハジメに気をつかってかハジメに関することを聞いてこなかったイリスだが、ふと気になって尋ねてみのだ。しかし、急に会話の止まったハジメを見て、聞いてはいけないことだったのかと思い、あせる。二人して会話がなくなつた頃にハジメは

決心した。

「イリスさん、これから話すことは…信じられないことだと思うんですが、聞いてください。俺は」

違う世界からいつの間にか来てしまったこと、着てからのこと、これからのこと、それらを休み無く話していく。三十分は話しただろうか。出された水を飲む。しばらく黙っていたイリスがまじめな顔をしてこちらを見る。不審がられただろうか、怒らせてしまったのだろうか、怖がられてしまったのだろうか、いきなり私は違う世界から来ました、なんで日本にいたときに自分が言われたのなら、まずそいつの頭を疑う。少なくともハジメならそうした。しかし、イリスの口から出た言葉は、ハジメの予想を超えていた。

「でしたら、しばらく家に住んでください」

真面目な顔から一転、いいこと考えたわ、と言わんばかりの笑顔で、癖なのか手をパチッと合わせハジメに言う。ハジメにとっては願ってもないことだが、ちよつと待てとも思う。この女性、危ういと。

「ちよつとイリスさん、いいですか。その提案は俺にとってはずごく助かります。嬉しいです。違う世界から来たことも信じてくれたことは非常にありがたいですけど、ちよつと無警戒過ぎます。もしこれで俺が危険な人物だったらどうするんですか！それに女性だけの」

ハジメの説教が始まった。ハジメは、イリスにとって命の恩人だが、ハジメにとってもイリスは命の恩人だった。そんなハジメは、恩人がこんな性格なことに危機感を覚え、柄にもなく説教していた。

しかし、終始笑顔のイリス。聞いているのか聞いていないのかわからない。

「聞ってるんですか！イリスさん！」

と、少し強めの口調で言うと、ハジメさんだから言ってるんですよ。といわれた。ぐうの音もでないとは今のハジメのことを言うのである。そんな殺し文句を言われては、もう黙るしかなかった。お世話になります。とイリスに伝えると、部屋を一つもらった。娘と二人暮らしをするには広いんですよ、と笑顔で言うイリスに、もはや何も言えなくなった。それからしばらくしてイリスは、夕飯の時間までは、自分の好きにしてください。私は長老に伝えてきますので、と言って家を出て行った。

もらった部屋はつかってなかったと言う割りに手入れはきちんとされていた。この家はもともとイリスのお姉さん、アリスの本当の両親のものだったらしく、お互い天涯孤独になってしまったのを見て、長老が、親子になり、そこに住めと提案したとハジメは聞いている。

ベッドに寝転がる。この世界に来てからのことを振り返る。今まで生きてきた25年の中で一番濃い時間だった。これからもそうなるのだろうか、と多くの不安と、ほんの少しのドキドキを胸に抱えながら、ハジメは眠りについていた。

ゆさゆさと身体が揺れている。きっと双葉が自分を起こしているのだろう。そう思いながら、後五分、と伝えると、小さな声で答えが返ってきた。

「…だめ、ご飯できてる…」

その声に反応して、ガバツと起きる。急に起き上がったことに驚いたのか、キヤッと可愛らしい悲鳴が聞こえた。

「ご…ごめん！大丈夫？」

「ん…」

大丈夫、と言うアリスはもう一度ご飯できると伝えたと、ハジメの手を引いて食卓へと向かう。寝すぎたな、と思いながらもハジメは引かれる手を見ながら笑顔になった。双葉も昔はこんなだった、と懐かしむように。

手をつないで登場した二人に少し驚いたイリスは、あらあらと笑顔になり、お昼よりも少し豪華な食事をお皿に持っているとところだった。

「すみません、いつの間にか寝てしまっていて…」

と言うと、いいですよ。それよりお腹すいてますか、と帰ってきました。さっき食ったばかりだけどなと思ったが、どれくらい寝ていたのか、腹は減っていたので、ペコペコですと伝えたと、シチューのようなものをたくさんよそってくれた。

食事はとてもおいしく、森を彷徨っていたときに食べていたものは比べ物にならなかった。おいしいおいしいとばくばくと食べていると、やっぱり男の人は食べるのね、とイリスがいうので、少し自重するべきだったか、と反省した。

お昼のときよりも会話は弾み、アリスともなかなか話せたハジメは、今日から家に厄介になることを伝えたと、もう知っているかと答えた。イリスはすでに伝えていたのだ。これからよろしくと伝えたと、ん…と相変わらず小さな声で答えた。

食事が終わり、明日長老のところに行くことになったことをハジメに伝え、イリスはアリスと共に寝室に行った。まだ眠たくないハジメは静かに外に出た。

街灯などが無いこの村では夜空の星が夜の光だった。満点の星空など、日本にいたときには見たことなかった。三つある月が明らかに地球じゃないことを示していて驚いたが、それももう、どうでも良くなってきた。今更じたばたしてもしかたない。そう思っただけで、く夜空を見上げていたが、また眠くなってきたので、今日はもう寝るか、と部屋に帰っていった。



## 冒険五日目（後書き）

と、から始まる文章が多いですね。違和感を感じない程度に気をつけたいと思います。お気に入り件数や、評価点、ユニークアクセス数が増えてきました。

大変嬉しく思っております。ありがとうございます。

## 冒険六日目

窓から差し込む光が、朝が来たことを知らせる。昨日の夕方に寝てしまったせいか、早く目が覚める。朝五時くらいだろうか、と考えたところで、ハジメはこの世界の常識をまだ聞いていないと思う。通過、時間、日……すべてを話したイリスにならこれらのことを聞けるだろうと考え、勉強しないと思う。

十分ほどボーっとしてみると、遠くにぼつぼつの人が見えてきた。農家の人だろうか、道具らしきものを背負ってどこかに出かけて行く。そういえば、今日長老のここに行くといっていたな、と思いにつけていると、妙な匂いがする。匂いというよりも臭い。窓を開けているわけでもないし、部屋の扉が開いているわけでもない。とどのつまり、ハジメは臭っていた。最後に風呂に入ったのはいつだったか、少なくともこの世界に来てから、精々足に水が浸かっただけであった。

この臭い持つて長老の所へ行くのはまずいと思ったハジメは、風呂に入りたいと思う。しかし、この世界に風呂はあるのだろうかという疑問が残る。とりあえず部屋から出て、音を立てないように風呂を探し回る。これでは泥棒と変わらんなどと考えて探すこと五分。見つからなかった。しかたなくタオルで身体を拭くことにしたハジメは、外にある井戸に向かった。タオルや服はイリスから借りていた。男物の服は、イリスの姉の旦那の者らしく、着る人もいませんから、と言われたので受け取っていた。

カティスのところで気がついたときには入院服の様な服に変わっており、元の自分の服がどうなったのか、あとで聞きに行こうと考えた。財布や携帯が入っていたからだ。井戸で水を汲み、桶に移し自分の部屋に持ってくる。タオルに水を浸し、裸になり身体を拭く。春っぽい季節とはいえ、朝の井戸水は冷たく、声を出しそうになる

が、我慢しながら身体を拭く。しばらくゴシゴシと拭いていると、二の腕を見る。あれだけ深かった刺し傷がすでに傷跡になりかけていた。治りが早すぎると思ったハジメは、もしかしてこれが魔法なのか、と思う。

「また…傷跡が増えたな…」

そうポツリと呟いた。少し雰囲気を作って言うハジメの背中には、無数の切り傷があった。その傷はまるで刃物で切り刻まれたようなもので、背中いっぱいに広がっていた。格好をつけてながらも、ゴシゴシと下半身を拭いていたハジメだが、この傷は大学時代にマッドサイエンティストごっこなる遊びをしていたとき、何と何を混ぜたのか、怪しい煙を出し始めた。慌てたハジメは窓の外にそのビーカーを放り投げると、突然爆発し、窓ガラスが背中に無数に突き刺さり、傷だらけになったという、実にくだらないものだった。

「若かったな…」

などとはざきながら足を拭いていく。若くもなんともないただの無謀だった。

全身を拭いて終わり、トランクスっぱい下着を穿いたときだった。コンコンとノックをした後、ドアが開く。扉に背を向けながらハジメは思う。カギないしな…と。

「ハジメさん…起きてま…」

ガチャリとドアを開けて入ってきたのは、イリスだった。トランクスー丁の男が首だけ振り返ると、目が合い、時が止まった。

- side イリス -

イリスの朝は割かし早い。朝ごはんのしたくに洗濯物、それらを早くに終わらせないと、朝の仕事に間に合わないからだ。それに今日はハジメを長老の所に連れて行く用事がある。それを考え、いつもより早くに目が覚めたイリスは、隣で眠るアリスを起こさないようにベッドから出る。向かいの部屋からゴソゴソ聞こえるので、ハジメさんは朝早いね、などと考え、井戸水を汲み、流しに運ぶ。顔を洗ったところで、ハジメに井戸の場所を教えたが、井戸の使い方を教えてないことに気がつく。

違う世界から来た。という話を聞いたとき、初めは信じられなかったが、かみ合わない話や真剣な表情を見ているととても嘘をついているようには見えなかった。どんな世界から来たのかは聞いていないが、もしかしたら井戸の使いかたを知らないかもしれないと思った。早いうちに教えないかと思ったイリスは、いそいそとハジメの部屋に向かう。扉をノックしようとしたところでハジメの声が聞こえた。

「また…傷跡が増えたな…」

小さな呟きだったが、閑静な朝の空気はその音をはっきりと運んだ。二の腕の傷のことを言っているのだろう。それを聞いたイリスは申し訳なく思う。自分を救うために人が傷ついたのだ。優しい彼女が自分を責めないはずはない。少し悲しげに聞こえた声を聞き、イリスは扉をノックすることをためらった。しかし、すぐに次の言葉が耳に届く。

「若かったな…」

その口調は、先ほどとは違って楽しそうな、面白いことがあったような口調に聞こえた。

どういうことだろう。とイリスは悩む。私を助けて、傷が増えて、若かった…三つのことを考えていると、イリスに一つの答えが浮かぶ。もしかして、ハジメは歴戦の戦士ではないのか。「彼女を助けられたのはいいが、あの程度の敵に傷を負ってしまうとは、俺も若いな」と言う意味ではないのかと考えた。

マンティスを一撃で両断したとき、手に持っていたのはナイフよりも小さなものだった。あんな大きさを、マンティスを一撃で倒す小さなナイフをもっているのは、この世界でも名の知れた冒険者だけだ。つまり…と思いイリスは少し元気になる。本当にイリスを攻めているわけではなかったのだ。これまで話をしてきてイリスはハジメに好印象をもっていた。身体の線こそ細いが、丁寧な口調、落ち着いた雰囲気、何より人見知りのアリスが懐いている。年は私よりアリスが近いかもしれない…などと思いながら、笑顔になり、ノックしつつドアを開ける。

「ハジメさん…起きてま…」

そこまで言っただけで目にした光景に、イリスは止まってしまった。トランク姿のハジメが立っていることにも驚いたが、ハジメの背中には無数の傷跡があったのだ。一つや二つではなく、何十という。その光景に何も言えなくなっていると、

「あーすみません、イリスさん。凝視されると恥ずかしいのですが…」

と少し苦笑いをしながらハジメが言ってくる。そのときになってようやくトランク姿だったということを思い出し、顔を赤くして

後ろを振り向く。

「す…すみませんっ！い…井戸の使い方を…教えようかと思いマシテ…」

尻つぼみになる自分の声を少し情けなく思いながら、イリスは傷のことを考える。いったいどれほどの戦いを潜り抜ければ、あれほど傷がつくのだろう。自分の考えは間違っていないかった。ハジメは異世界の戦士だったのだ。イリスの結論だった。

「ああ、井戸の使い方なら判ります。今水で身体を拭いていたんですよ」

振り返るときに目に入ったのは、確かにタオルと水の入った桶であつた。ハジメの世界にも井戸はあつたらしい、と考え、直ぐに食事の準備をしますから、といって部屋を出た。少し冷たい言い方に聞こえたかも知れないと思つたのは部屋を出て直ぐだったが、それよりも、イリスは別のことを考えていた。

- side out -

食事の準備をするといって部屋を出て行くイリス。若い女性にトランクス一丁の男の姿は目の毒だったか、などと考えながら、もらった服を着る。綿よりも麻に近い少し硬い素材の服だが、風通しがよく、水で拭いた身体には丁度良かった。

身体を拭いた水をどうすればいいのかわからないのでイリスに聞く。部屋を出ると、丁度アリスも向かいの扉から出てきた。

「おはよう、アリス」

「ん…おはよう」

まだ少し眠そうなアリスは寝癖をつけながら目をこすっていた。双葉にもこんな時代があったなーと今は遠い昔を思い出しながら、アリスの頭を撫でる。無意識に撫でていたため、しまった！年頃の女の子に！と思いつつ手を引く。

「あつ…」

とアリスが名残惜しそうに呟くがそれはいつもより小さく、ハジメの耳に届いてはいなかった。そうだ、とハジメはアリスに身体を拭いた水をどうすればいいかを尋ねた。アリスは、ん…と言うとハジメの手を引いて家の外に出る。家の裏に排水口のような穴があり、そこに水を捨てると教わった。アリスに例を言い、水を捨てる。丁度そこでイリスに食事が出来たと言われたので、少し早めの朝食を取る。

朝の仕事に言ってくるというて出かけるイリスを見送り、部屋でごろごろしていると、ノックが聞こえた。どうぞと声をかけるとアリスが入ってくる。アリスが部屋を訪ねてくるのは初めてのことだった。

「どうしたの？」

とたずねても、下を向いて何も答えない。どうしたんだろうと思いい、ベッドに腰掛けたハジメは、隣をとんとたたき、おいでと言つと、アリスは少し嬉しそうに顔を上げ、ハジメの膝の上に座った。

あれ？とハジメは思う。隣に…ということだったのだが…まあいい

か、と思考を終わらせ、もう一度どうしたのと聞いた。

「お母さん、いないから…」

近くにいても小さな声は、悲しげだった。つまり、寂しかったのだ。イリスの話では両親が亡くなったことも知っているという。もしかしたら父親が恋しいのかもしれない。と思い、ハジメは切なくなつた。

「よし、じゃあ遊ぼうか！」

と少し元気づけるように大きな声で言うと、アリスはまたほんの少し嬉しそうに、コクンとうなずいた。

遊ぼうか、と行ってみたものの、この年になってハジメはこんな小さな女の子と遊んだことはない。妹の双葉と遊んだ記憶などほとんどないし、どうしていいかわからなかった。

「えーっと、アリス？アリスは普段何をしてるの？」

何をしているのか判らないハジメは、とりあえず情報と、アリスに尋ねてみる。

「いつもは…本…読んでる。たまに…」

そう言って言葉を濁す。言葉の続きが気になったハジメはじつと黙る。アリスはそれを言おうか言わないか悩んでいるようにも見えたが、決心したように呟く。

「たまに…魔法の練習…」



今、なんと言ったか。ハジメは言葉の意味を半数する。魔法。ここが違う世界と認識するきっかけになったファンタジー的要素。しかし、カティスやイリスの話によると魔法を使える人は少なく、とても貴重な力だと聞いていた。

「え…ま…魔法使えるの!？」

少し声を大きく出しすぎてしまったのか、アリスが少し驚いたようにしていたので、ごめんと誤ってもう一度聞く。コクンとうなずいたアリスはこちらを見て、

「…秘密…」

と言った。誰にも言うなということだろうか、ハジメが確認すると、コクンとうなずく。しばらくアリスの話を聞いていると、秘密にするといった理由がわかった。

アリスが魔力を持つことがわかったのはアリスが赤ちゃんのころだった。アリスの両親が泣いているアリスが泣きながら無意識に魔力を放っていることに気がついた。イリスやイリスの姉の祖父が魔術師だったらしく、アリスの母親はそれが魔力だと直ぐにわかった。魔法は素晴らしい力でもあるが、同時に恐ろしい力でもある。それを知っているアリスの母親はそれを黙ることに決め、ベビーシッターを頼んでいたイリスにも伝えた。魔力を持っているとがばれ、貴族や国に目をつけられると、最悪連れて行かれる可能性があったからだ。それを両親がなくなつたあと、イリスから告げられて、今では暇なときにこっそりと練習しているという。

「でも…そんなことお…私に話しても大丈夫かい？」

俺と言いそうになるのを慌てて直すと、普通にいいと言われた。  
無理に変えていたことに気づかれてたこともショックだが、小さな  
女の子に氣を使われたのもショックだった。

「ん…ハジメ…は、大丈夫」

というと、少し微笑む。初めて見たかもしれないアリスの笑顔は  
とても可愛らしかった。

## 冒険六日目（後書き）

あれ？（。°。°。°）・・・

話ぜんぜん進まない・・・のんびり話とらへて・・・。

## 冒険七日目（前書き）

プロット…などなく、その場その場で考えているので、変な話が多いかも知れません。

## 冒険七日目

魔法、それは空想の力。それは奇跡。それはあつてはならない力。すくなくとも科学万能の世界で生きてきたハジメにとって、魔法は漫画やアニメの中の力だった。手のひらから火を出す。水を操る。雷を落とす…など、ゲームではおなじみの力。しかし、モンスターに襲われ、怪我まで負ったこの世界、ここでは魔法は存在し、この目の前の小さな女の子が使えるというから驚きだ。

魔法が使えるとカミングアウトしてからすでに十分。動かなくなったハジメをどうしたのかな、と思いながらもアリスはじっと待っていた。ようやく思考が落ち着いてきたハジメはアリスにお願いを試してみる。

「あー…アリス君、そのー…魔法を見てみたいのだが…だめ…かな？」

なぜか口調が変になってしまったハジメに首をかしげながらもアリスはこくんとうなづく。

「ん…」

と人差し指を立て、集中するようにアリスが何かを唱え始めた。すると小さな火が指先に灯る。マジックではない。魔法である。色々な視点からそれを興味津々で見っていく。まさしく魔法であった。

「これが…魔法…」

感動しているハジメに、アリスは少し気を良くしたのか、火の大

きさを大きくしていく。火が十センチほどのボール上になったとき、アリスが口を開く。

「私は…火の属性だから…火が得意…」

そういつて指先の火を小さくしていき、火は消えていった。まだ魔力量はそんなに多くないらしく、長時間使うと熱が出てしまうと説明を受ける。先日までの熱はそのためなら、無理をさせてしまったなと反省するハジメだった。

アリス先生の講義を受けたハジメは、ある程度の魔法に対する知識を手に入れた。要約すると、魔力を持った人には、それぞれ属性があり、それぞれの属性にあった魔法を使うことが出来るとのことだった。一人の人間が、二つ以上の属性を持つことはなく、一人一系統だという。火、水、土、風、これらの四大属性の他に、闇、光、雷などがあり、滅多に現れない属性だという。四大属性にも偏りがあり、魔力を持つものの五割が火、二割が風と土、残りの一割が水だという。それぞれの特徴を挙げるのならば、火と風は攻撃に、土は守りに、水は回復に適している魔法が多い。特に水の属性を持つものは数が少ない上に回復が出来るということで大変貴重な属性であり、仕事に困らないとのことだった。

ハジメが訳すると十分ほどで終わる説明も、アリスのポツポツとした説明ではおよそ一時間かかったことは、ご愛嬌だろう。

魔法の講義が終わることには、イリスが帰ってきた。お昼と一緒に食べ、一緒に行きたいというアリスを引き連れ、長老の家に向かう。その途中でアリスが魔法を使えることを教えてくれたことを伝え、驚いた後、ややあつてにつこりと笑い、アリスを優しく撫でた。その姿を後ろから見ていたハジメはあつたかな気持ちになり、親子など、血のつながりではないな、と思っていた。

長老の家では、イリスが話を通していたおかげか、すんなりと話は進み、見事イリスの家への居候が決まった。異世界から来たことなどは伏せておき、魔物との戦いで記憶をなくし、森を彷徨っていたところ、イリスを助けることになった、という筋書きになった。

帰りにカディナの診療所による。自分の持ち物は捨てたのかとたずねると、一応とつてあるとカディナは答えた。一応とはどういうことだとたずねたところ、

「白い袋みたいなのに入ってた魚、ありや腐ってたから捨てたけど、いるの？」

とジト目で見られた。どうやらかなり臭ったらしい。すぐさま土下座しそうな勢いで誤り倒す。まあいいけど、といい、カディナは服とズボン、財布と携帯と折れたカッターをもってきた。

「これで全部だろ？申し訳ないけど中身を見させてもらったよ。見たこともない通貨だったね。しかもかなり精巧な。どこの国のものだい？」

少し疑うように聞いてくるカディナ。さて、どうやってごまかすかと悩んでいると、イリスから助け舟が入る。

「昨日そのあたりのお話を少し聞いたわ。カディナさん、今はそつとしてあげて。今長老様の家にいって、私たちと一緒に暮らすことになったわ。いずれハジメさんから話してくれるはずよ」

そう言ってイリスはカディナを諭す。イリスには弱いのか、カディナは、いつか教えなさいよ、と笑い奥に引っ込んだ。イリスにお礼を言い、アリスと三人で家に帰る。その帰り道、父親に肩車をさ

れてはしゃいでいる親子をじっと見ていたアリスに気づく。ハジメは体力や筋力に自身はないが、小さな子供くらいなら持ち上げられるだろうと思い、よし！と気合を入れアリスを後ろから一気に抱き上げ、肩車の体勢へ持つていく。可愛らしい悲鳴が聞こえたが、すぐに何をされたのかわかったアリスは、少し照れたように笑った。少し歩くと、恥ずかしかったのか、降りるといいだし、降りしてあげると先に走って帰っていった。横では、あらあらとイリスが優しく笑っていたが、ハジメは内心ほっとしていた。

アリスを一気に持ち上げたとき、ハジメは腰をやっていた。かつこつけた手前、どうにもならず到我慢をしていたが、もしアリスが途中で降りず、家まで肩車をしていたら大変なことになっていただろう。

先に帰っていてください、もう少し街を見てまわりますとイリスにいうと、夜ご飯の支度をしながら帰りますといい、家に向かっていった。イリスの姿が見えなくなると即効で腰を叩く。

「あああああ…理系の俺、無理しすぎ…」

腰をとんとんと叩いていると、後ろから声がかかる。野太い男の声だった。

「おう！にいちちゃん！怪我良くなっただんだな！」

筋骨隆々のおっさんだった。はて、こんな知り合いいたのだろうか、いや、男性の知り合いなんて長老くらいしかないぞ…などと考えていると、それが顔にでたのだろうか、おっさんは自己紹介をしてくる。

「ああ、そっぴや氣を失っていたな！俺はアイン！この村の警備を



してるもんだ！気を失ってたおめえさんを村から診療所まで連れてったのも俺だぜ？」

ひげ面のおっさん、アインは仕事終わりなのか、少しだらしの無い格好だったが、それが逆に似合っていた。

「ああ、そうでしたか…。怪我はすっかり良くなりました。ありがとうございます」

お辞儀つきのお礼を言うと、アインは慌ててたいしたこととしてねえから頭をあげな！といい、俺のことはアインと呼べ、などとアニキ風をふかし、その場をさった。

腰の痛みが引いてきたところで家に戻ると、少し機嫌が悪そうに見えるくもないアリスと、くすくすと笑っているイリスが料理をしていた。ただいま、と少し照れくさくいうハジメに、二人はおかえり、と返す。その人のご飯は少し贅沢で、とてもおいしかった。

- side イリス -

街を見てまわるというハジメと分かれて、イリスは家に戻る。今日のご飯は、ハジメさんが新しい家族になった記念に奮発しようと考えていた。

家に帰って出迎えたのは、アリスだった。肩車がはずかしかったのか、先に帰っていたアリスは、平然とした顔でテーブルに座っていた。ただいま、というとお帰りと返す。しかし、そのあとで少し首をかしげる。どうしたのとたずねると、少し照れたように

「…ハジメは…？」

と聞いてきた。アリスがハジメに魔法のことを自ら伝えたとき驚いたが、アリスがハジメのことを日に日に気に入っていることがわかり、嬉しくなるイリス。今も姿が見えないハジメのことを気にかけている。

街を見にいったことを告げると、珍しく不機嫌になる。きっと連れて行ってほしかったのだろうことをすぐに見抜く母親は、その娘の姿がほえましく、しかし少しさびしくなった。やはり、父親がいたほうがいいのだろうか、私では親としてできていなかったのかと。少し落ち込むが、それなら母親は私で、父親はハジメさんね…あら、嫌だわ…と一人で盛り上がっていた。

アリスは面白くなさげに皿を並べる。しばらくすると、思ったよりも早くハジメが帰ってくる。ただいまという言葉を少し照れくさそうに言うハジメに、アリスと一緒に帰りなさいと伝える。すぐにアリスの不機嫌を感じ取ったハジメがイリスに目で合図を送るが、イリスはそれをニコニコと見るだけだった。

- side out -

いつもより豪華なご飯を食べ、いつもより不機嫌なアリスをなだめ、いつもの寝る時間になっていた。ご飯を食べながらハジメは思っていたことがあった。

俺、このままじゃ、ひもじゃね？と。

母と娘の二人暮らしというだけで、地球では大変な生活を送ることになるだろう。そんなところに男が転がり込んできたら、食費だ

けで大変なダメージを家計に与えてしまうのではないのか、そう考えていた。

これは火急に仕事を見つけないといけない、と思ったハジメは、イリスに聞こうと思うが、思いとどまった。イリスのことである、きっと遠慮することは目に見えていた。そこでハジメは、アインに聞くことを決め、眠ることにした。

朝、少し痛む気がする腰をちよつと気にしつつ、イリスから聞き出したアインの家を訪ねることにした。

## 冒険八日目（前書き）

本当に過去編が長くなりそうですので、いつか話を統合して短くしたいとおもってます。ゆっくり進んでいます。おせえYO!と思う方もうしわけありません。

## 冒険八日目

朝起きて、顔を洗い朝食を食べる。イリスとアリスには朝食時に出かけることを伝え、イリスにはアインの家を聞く。アリスは少しさびしそうにしていたが、脱ひも生活を目指すため、ここは我慢してもらう。

そしてお昼が過ぎた頃、ハジメは慣れない農作業をしていた。アインに相談しに言った結果、お金と食料を同時に作ることができると言われ、イリスに聞いたところ、家の裏の畑は今何も作っていないと言われ、よし、農家の真似事をしてみるかと意気込んだのが失敗の始まりだった。

「の…農業…なめて…ましたっ…」

ゼーハーゼーハーと息も耐え耐えに土を耕す。だいぶ放置されていた畑なのか、家の裏にあった畑は草は生え、土は固くなっていた。イリスに借りた農具で草をむしり、土を掘り起こしたところでハジメの体力は尽きた。もともと体力があるほうではないハジメからしたらがんばったほうである。イリスの夕飯ですよという声を聞く頃にはなんとか土を掘り起こす作業が終わったところだった。

風呂という習慣が無いため、土まみれの身体をよく拭く。少し痛い身体を引きずりながら食事をする。いつもよりおいしく感じたのは働いたからだろうか。

食べているときに、アリスに何を育てるのと聞かれ、ハジメが決めてないことを伝えると、ポテモ（ジャガイモに似たこちらの世界の主食）はどうですか、とイリスに言われ、育てることを決めた。大体一月ほどで食べごろの大きさに成長し、収穫できるという。ア

リスが何か言いたそうにしていたので、聞いてみると、アップリという果実を作ってほしいといわれた。アリスの好きな果物らしいが、最近は作っている農家が少なく、なかなか食べれないといていた。こっちは食べられる果実が実るまで二ヶ月ほどらしいので、作ってみるよと言うと、嬉しそうにしていた。

翌朝、ハジメの身体を激痛が襲っていた。筋肉痛である。あまりの痛さに起き上がることもできなかったが、十分ほどかけてなんとか立つことができた。一步前進すると激痛が走る。慣れない作業をしたせいなのか、全身筋肉痛になっており、動けなくなったところにアリスがハジメの部屋にやってきた。朝食できたよ、といってなぜかその場に立って動かないハジメの手を引く。ハジメの切ない声が家の中に響いた。

朝食を食べ終わることは何とか動けるようになったハジメは、近くの農家を回って種をもらうことにした。アリスもついていきたいといったので、イリスに許可をもらいアリスと共に家をでる。道案内をアリスに頼むと手を引いて案内してくれた。あまり早く動くと身体が痛いのだが、言えないハジメであった。

農家の家々をある程度周り、ポテモとアップリの苗をもらうことができた。がんばれよ、と激励の言葉までもらい、村の人の温かさが身に染みた。

裏の畑に来たハジメは、土の状態を見る。農業に詳しくないハジメではあるが、この土が畑に適していないことだけは判った。砂漠一步手前のような状態なのだ。農家を回ったとき、畑も何箇所か見たが、似たような土だった。この土、栄養がないんじゃないか。ハジメが思った疑問だった。肥料は何を使っているんですかと聞いたハジメに、肥料？と聞き返してきた農家の人の反応を見て、原因がわかった。

てつとり早い肥料は人の肥しである。が、アリスやイリスに頼むことなどできるはずもなく、肥料の概念のない村の人から集められるわけもない。完全に変人扱いになることは目に見えている。そこでハジメは残飯を肥料にする機械が日本の家にあつたことを思い出す。残飯を箱の中に入れておくといつの間にか肥料になっているアレだ。残飯なら家からもでるし、食事屋にいけば大量にもらえるかもしれないと思ったハジメはさっそく向かう。アリスには留守番をしてもらい、村へと走っていった。

ほどなくして、残飯をもらってきたハジメは畑にまきながら耕す。臭いが出ては困るので、埋めるようにして耕す。その作業だけで時間を食ってしまったが、種を植え付けるとこまでは何とかすることができた。水をまき、今日の作業を終える。

食事中、アリスが畑に何をしていたのと聞いてきたので、土に栄養をつけていたんだよと答えると、親子二人してキョトンとしていた。問題は次の日起きた。

「ハジメさん…ハジメさん…起きてください」

ゆさゆさと身体が揺れ、ハジメは目が覚めた。今朝は身体に痛みはなく、むしろ運動をしたせいか調子がいいようにさえ見えた。

目の前には少し困ったような顔をしたイリスがいた。朝食には少し早いとおもったハジメはどうしたんですか、とたずねる。するとイリスはやはり困ったように答えた。

「その…畑なんですが…昨日栄養とか言ってますでした？何かしたんですか？」

残飯をばらまきましたとは言えないハジメは、ええ少し。と言葉を濁した。そこでまどから漂う臭いに気がつく。これは、確実にものが腐った臭いだった。まさか、と思ったハジメは急いで畑に向かう。異臭の原因がそこにはあった。畑からだだもれの異臭は、このままでは村に広がること間違いなしであった。

イリスにどうかします、と謝り、朝食の準備をしてもらう。その際、家の窓をすべて閉めてもらうことにした。

一人になったところで、ハジメは考える。臭いをどうするか、では無く、成長が早すぎるということを。昨日植えた種は、すでに芽が出て、葉をつけていた。土も、昨日のように砂漠のような土ではなく、栄養がありそうな土壌になっていた。なによりもこの臭い。いくら残飯とはいえ、一日で腐ったりはしないはずだった。一体どういうことだ、と考えている間に十分ほど過ぎ、考えがまとまらなさと悟ると、やっと臭いをどうかしないと、と考え始めた。

さらに上から土をかぶす、しかしせっかく芽が成長しているのでこの案だけは使いたくない。どうしたもんかと考えながらもハジメは植物に水を撒く。臭い浄化の魔法でもあれば便利なのに、と考えながら水を撒いていたハジメは、

「臭い消えろー浄化浄化」

と言いながら、やけくそ気味に作業を行う。すべての水を撒き終わる頃に異変に気がつく。臭いがしないのだ。さっきまでしていた臭いがまったくしない。水が臭いを消してくれたのか、水にそんな力はないと直ぐに考えを変える。これだけ成長が早い世界だから、分解も早く、臭いの原因である残飯が水と合わさることで即効分解された、というのが無理矢理なハジメの回答だった。とりあえず臭いは消えたのだ。少しほっとして家に帰る。ただいま、とハジメが



なれてきた挨拶をすると、朝食の準備をしていたアリスとイリスがお帰りと答えてくれるはずだった。

「おかえ…」

言葉は最後まで発せられることは無く、イリスの気まずそうな顔と、アリスの驚く顔によってさえぎられた。どうしたんだろうと思っ  
ていると、イリスが優しい目と声で、大丈夫ですから、と言っ  
てきた。なんのことだろうと思い、どうかしたんですか、とたずね  
ると、少し恥ずかしそうな顔をしたあと、ゆっくりとハジメのズボン  
に向かって指を刺す。場所的には股間。少なくともイリスの様な女  
性が指を刺す場所ではなかった。が、ハジメがそこに目を向けると  
今度はハジメが驚愕した。

濡れていたのだ。まるでお漏らしをしてしまったように。

「なんじゃこりゃああああー！」

思わず叫んだハジメは、自分の身に何が起こっているのかもわか  
らず、混乱していた。

- side イリス -

朝、変な臭いがすることに気がつきイリスは目が覚めた。日に日  
に暑い夜になってきたので、窓をすこし開けながら寝ているが、そ  
の窓から臭いが流れ込んでいた。外に出てみると、どうも畑のほう  
から臭いが出ているようだった。

そっいえば、昨日ハジメさんが何か栄養をやったといっていたわ

ね：そう考えたイリスは、ハジメに聞いてみようと思い、ハジメの部屋に行く。寝ているハジメを起こすのは申し訳ない気持ちになるが、この臭いが村中に広がるのは少しまずい気がしたイリスは、心の中であやまりながらハジメを起こす。

直ぐに臭いに気がついたハジメと一緒に畑に向かう。どうにかしますので、と言い家に戻るように言われたイリスは、頼もしいわ、と思います言われたとおりに窓を閉め、朝食の準備をしていた。

朝食の匂いが家に広がるころにはアリスが起きてきた。おはようと挨拶をした後に顔を洗いに外に出る。帰ってくると、お外臭いといい、今朝の話をする。ハジメが言うなら大丈夫、と誇らしく言うアリスを見て、いつの間にそんなに仲良くなっただのかしら、とイリスは思いながらもやはり嬉しく、ほほえましくなる。

アリスに手伝いをしてもらい、そろそろ料理が出来上がるというころ、ハジメが帰ってくる。ただいま、という声にかけりがないことを見ると、どうやら解決したようだった。お帰りなさいと答えようとしたところで、ある一点に目がいつてしまう。女性としてそこだけに目がいくのはとても品のよくないことだとは思うが、しかしそれもしかたない。ただいまと言う笑顔のハジメの股間が濡れていたのだ。それはもう見事に。

イリスは、ハジメのことを二つ、勘違いしていた。一つは年齢、ハジメを十五、六歳くらいと思っていた。もともと童顔のハジメだが、日本人特有の黒髪黒目が特に若く見せていた。もう一つは身体の傷である。そのことでハジメを歴戦の戦士と思っていた。これら二つの勘違いと、目の前のが合わさったとき、さらなる勘違いを生む。

戦いすぎて、身体に障害をもってしまったのではないかと。

その後、ハジメが自分のズボンが濡れていることを発見すると、驚きのあまりに声を上げていた。それを見たイリスは、さきほどの考えが間違っていないこと確信し、ハジメに優しく大丈夫ですよ、と声をかける。それでもやはり恥ずかしかったのか、顔を赤くしてハジメは部屋に走っていった。その姿を少し可愛いと思ってしまう。イリスは不謹慎と思い、首を振り考えを消す。

料理を盛り付け終わったところでズボンを変えてきたハジメが恥ずかしそうに帰ってきた。違うんです、アレは匂いを消すために水を撒いていて、その水が…と椅子に座った瞬間に言うハジメに、アリスが、私も昔していたから…と恥ずかしそうに、でも優しくハジメに言う。人に気を使えるようになった優しい娘を見て、イリスは嬉しくなる。ハジメの違うんだーと言う叫びも聞こえないほど胸のいっぱいになったイリスは、何事もなかったように食事にすることにした。

その日の朝食にはその話は一切でてこなかったが、それが逆にハジメをいたたまれなくしていた。

- side out -

## 冒険九日目

朝食を手早く終え、逃げるように部屋に戻ってきたハジメ。いつもより優しい気がする目や、まったくさきほどの「アレ」に触れない話題…すべてがきつかった。

「あ…あれは…水だと思うんだ…」

誰に言うわけでもなく、呟く。布団の中で。生まれてきて25年、あんなに恥ずかしいことはなかった。穴があったから入ってみた、まさにそんな状況だった。

コンコン、と扉がノックされる。正直今は出たくないところだが、そんなわけにもいかず、ハジメはドアを開ける。そこにはアリスが立っていた。自分の失態を見たとき、アリスの表情は驚いていたな、と思い、また落ち込んでくる。が、アリスの話はそんなハジメの度肝を抜く内容だった。

「ハジメ…お兄ちゃん…魔法…使えたの？」

ハジメに衝撃が走った。「お兄ちゃん」…アリスがハジメのことを呼ぶのは初めてかもしれない。しかも今まで言われたことのないハジメお兄ちゃん。双葉という妹がいたが、いつも「おい」とか「ねえ」と呼ばれていたため、正直敬称にあこがれていた面もあった。が、成長するとそんなこともなくなり、気にもなくなっていた。そこにアリスのお兄ちゃん攻撃。ダメージは甚大だったが、今はそれよりももっと重要なキーワードが聞こえた。

「魔法…だと？」

そう、魔法である。使えたの？と聞いているからには使ったのだろうが、ハジメにはそんなことをした覚えもない。むしろ恥をかい  
た覚えしかなかった。しかし、アリスは魔力の流れをハジメから感  
じたという。

魔法には、魔力に言霊を乗せることで初めて発動し、魔力条件や  
言霊は人によつて様々なものがある。特に魔力条件は重要で、本人  
でもわからないことがあり、珍しい魔法条件の場合、一息がつか  
ないこともあるという。アリスの場合、魔力条件は魔力の消費、言  
霊は頭に思い浮かべるだけでいいのだという、好条件のスペックだ  
った。

アリスからの追加の魔法講習を受け、ハジメは考える。アリスは  
魔法が使われると、魔力の残り香のようなものを感じることがで  
きるという。つまり、ハジメに魔力を感じたということは、ハジメ  
には魔法を使う力が備わっているはずである。魔力条件、言霊、そ  
れらを探し当てたとき、自分は魔法使いになれるかもしれない。そ  
う考えるとハジメはニヤリと口角をあげ、フフフと笑い出した。そ  
れを見てアリスが少し怖がっていたが、今はそれを無視して、今朝  
自分にあつたことを思い出す。アリスには悪いが、考えたいことが  
あるといい、一人になる。

今朝はイリスに起こされた。畑から異臭がしたからである。それ  
は昨日の肥料が原因であり、その臭いをどうにかすることを約束し  
て、水を撒いてしばらくすると臭いが消えた。と、そこまで考えた  
ところで畑に行ってみることにした。

臭いのなくなった畑に行くと、ハジメは驚愕した。今朝まで芽が  
ちよろつとでていただけの植物は、もう五センチほどの大きさにな  
っていた。ありえない成長速度である。そこでハジメはハツとする。  
植物の急成長、埋めた残飯の急激な腐敗。自分が掘った土にどれも

関係しているのではないか、そう考える。しかし、そうなる問題  
は言霊である。何かぶつぶつと言いながら作業をしていたかもしれ  
ない。アリスのように頭で思い浮かべるだけでいいのなら、何か考  
えながら作業していたのかもしれない。しかし、思い出せない。ど  
うしたもんか、とうんうんうなっていると、後ろからパキッと枝の  
折れるような音がする。振り返ってみると、そこにはこそつとち  
らを見ているアリスがいた。

目が合うと、アリスは少し慌てたように姿を隠す。が、もう見つ  
かっているので意味はなく、しかたないな、とハジメはアリスを呼  
んだ。ついでに自分の考えたことを聞いてみる。

「アリス、俺には土の属性があるのではないかと思うのだが、どう  
すればわかると思う？」

土属性があると思う理由と一緒に告げると、アリスは少し考えた  
あとに、

「それだけで、属性のことは…わからない…けど、魔法…使えた  
ら、魔力条件に…何かが起こる…魔力…減った感じ…した？」

自分の魔力が減ったのかどうかわからなかったハジメは、わから  
ないと答え、家に戻る。自分の部屋で考えをまとめることにした。

魔法は、魔力条件と、言霊がそろったとき、発動する。魔力条件  
は魔法を使った代償なので、今は無視。問題は言霊である。アリス  
に聞いてみると、昔読んだ本の中に、いろいろな言霊の条件集とい  
う本があり、その中には、「五文字以上の言霊」だとか「早口言葉」  
など、変わった言霊もあったそうだ。条件付の言霊の場合、見つけ  
るのは苦労しそうだ、と考えたところで、お昼ですよーと言うイリ  
スの声が聞こえた。

お昼を食べる頃には、両者すっかり今朝のできごとを忘れていた。ハジメとしては助かったが、それよりも魔法のことで頭がいっぱいだった。それは、そんな何もない平和なお昼に起こった。

「た…大変だっ…!!」

村中に広がるような大きな声が、食事中に響いた。何事かと顔を見合わせながら、全員で声のした方へ向かう。つく頃には他の村人も集まっており、輪の中には一人の男がいた。男はところどころ傷を負っており、カディナが傷の手当をしていた。

「イニ…どうした!? 何があつた!?!」

アインが男に声をかける。イニと呼ばれた男は、よほど急いで来たのだろう、息が上がっており、それでも話そうとしてむせていた。村人の一人が水を飲ませ、落ち着かせると、イニは話し始めた。

「ゴ…ゴブリンの群れだ…三体や四対じゃない…何十対つていやがつた…!!」

ザワリ…と村人に恐怖が広がる。イニが言うには、山に狩りに出かけた際、なかなか獲物がいないので普段は入らない山の奥まで言ってみたところ、動物の屍骸が散乱していたという。何事かと思い、もう少し奥までいくと、ゴブリンたちが何十対と集まっていたという。

「ゴブリンリーダーが複数いるかもしれんな…」

そう呟いたのは長老だった。その発言にさらに村人たちに不安の色が広がる。長老は、アインや警備の物を数人引き連れ、今夜中に

村の決断を決めるから、今は各自非難の用意をしつつ、家の中で待機となった。

ゴブリンという単語はなんとなくわかったが、それ以外のことや、村人がおびえる理由がいまいちわからないハジメは、とりあえず家に戻る。ゴブリンとの戦闘経験があるハジメは、数十対くらいなら、村の男全員が戦えばどうにかなると考えていた。普段運動などしていなかったハジメでも怯えながらに勝利することができたのだから、筋骨隆々のアイン率いる警備の者たちがゴブリンに負けるとは思えなかった。しかし、不安がっている村人。それから察するに、ゴブリンリーダーという存在がそれをさせないのだろう、とハジメはあたりをつけた。

家に帰ってテーブルに座るが、誰も言葉を発しない。そこでハジメは、ゴブリンのことを聞いてみる。戦ったことあるが、村人でどうにかならないのか、と。それを聞いて口を開いたのはイリスだった。

「ゴブリンが少数で群れるのは珍しいことではありません。しかし、何十対で群れるというのはまずありません。そんな場合はゴブリンリーダーと呼ばれるゴブリンがいるのです。ゴブリンリーダーがいる群れは、統率がとれており、厄介なんです。それに、ゴブリンリーダー自体も強いのです」

説明を受け、納得がいった。数十対の統率の取れたゴブリン…一個小隊クラスが攻めてくるようなものである。辺境に近いこの村が到底太刀打ちできるものではなかった。アリスが言うには、今日明日にでも非難する他道はなく、今から国や街に討伐依頼を出しても、間に合わないだろうとのことだった。

「アリスが…もっと…魔法使えたら…」



そんなときだった。アリスがぼそつと言ったのは。アリスは自分が魔法を使えることを村の人にばらしてでも助けたいと思っていた。それを聞いたイリスはそつとアリスを抱きしめ、そんなことしなくても大丈夫：みんな助かるから、と。

しばらく非難する準備を進めていると、イリスが部屋に来る。手には鞘に収められた剣を持っていた。形としてはククリ刀と青龍刀の間といったところか。

「これは？」

「義兄さんが持っていた剣です。といつても手入れだけして一度も使ったことはないそうなんですが：持っていてください」

そう言つてイリスは剣を渡してくる。意図することはわからないが、もしものがあつた場合、使えるかもしれない：とハジメは思う。カッターは巨大力マキリを倒したときに折れたし、他に武器もない。非難しているところを襲われたとき、アリスやイリスを守るためなら剣があつても損はしないだろうそう考え剣を受け取る。鞘から抜いた剣は、長らく手入れがされていないにもかかわらず光り輝いており、前の持ち主が大切にしていたことがわかった。思っていたよりも手になじみ、重さもそんなに感じない。たった数日畑仕事や力仕事をしただけだが、思ったよりも力がついたのか、前のハジメからは考えられないことだった。

非難の準備が終わり、少し早めの夕食を終えた頃だった。長老の使いの者が家を訪ねてきて、これから集会があるとのことだった。一応背中に剣を差し、全員で集会場に向かう。村人全員が来たことを確認すると、長老は重い口を開いた。

「皆の者、残念なことじゃが、村は放棄する。村も大切じゃが、命はもっと大切じゃ…戦って散す命があつてはならない」

長老の言葉に、村を捨てるという少しの悲しみと、戦わないという選択を取ったことへの安堵が広がる。殿は警備の者が務めることなどを話し、今後の行動を話しているときに、警告を告げる鐘が鳴り響いた。

「敵襲　　っ！敵襲　　っ！」

外から大きな声が聞こえた。ざわつく集会場。子供の泣き声や、ざわめきが大きくなってきたところで長老が口を開く

「静まれい！！戦える男連中は直ぐに守りを固めよ！女子供、年寄りはこちらで待機じゃ！こうなったら…逃げることはできん…すまぬ、皆の者…」

どんどん小さくなる言葉に、集会場は静かになる。最初に言葉を発したのはアインだった。

「うおっしゃー！いくぜ！野郎ども！ここで生き残った英雄には綺麗な嫁さんが待ってるぞ！！」

大きい声で勢いよく飛び出していくアインに、警備のものたちはオーー！という答えを持って集会場を飛び出す。その後から数人の男たちが立ち上がり集会場を飛び出していった。

ハジメは怖かった。ゴブリンはそれほど脅威じゃないことはわかっている。しかし、突然の襲来が、痛みなど感じなくなったはずの二の腕の傷が、ハジメを動かせないでいた。ゲームではないのだ。

死んだら終わりである。日本に帰ることもなく、しらないこの土地で死ぬ。その恐怖に震えていた。

「いいんですよ。無理をしなくて。無理はしてほしくないんです」

そう言っで優しく抱きしめられた。イリスの温かい胸の中で涙が出そうになるハジメ。同時に手を握りしめられる。

「ん…みんな、一緒…」

アリスの優しい声が胸に響く。そうだ、この人たちがいる。イリスやアリスをゴ布林なんかには傷つけられてなるものか、と思ったハジメは、恐怖が消えるのを感じた。

「行ってくるよ」

なるべく平静を保って立ち上がる。アリスは悲しそうに俯き、イリスはしばらくたって一言だけ、死なないでくださいといい、泣きながら微笑んでいた。この恩人や村の人を死なせるわけにはいかない…そう思ったハジメは、集会場を飛び出した。

- side イリス -

ゴブリンの襲来に備え、食料などの準備をしているときだった。物置になっている部屋の中で、一振りの剣を見つけたイリスは、これが義兄が大切にしていたことを思い出す。しばらく考え、この剣をハジメに渡すことに決めたイリスは、ハジメの部屋を訪ねる。

部屋に入って剣を渡すと、剣を抜き、確認していた。そのときの

顔が少し悲しそうに見えたのは、部屋の影のせいかな。イリスは自分がしていることが最低なことだと思っていた。ハジメが歴戦の戦士であることはわかっていて。しかし、守る戦いをしていたのだろう。ハジメについた傷。さらに今朝見たような身体の障害。それらを知った上で、知らないふりをしてまた剣を持たせた自分。この人はきつと戦うだろう。村を、自分たちを守るために。なんと浅ましいことか。自分自身がいやになってきたイリス。ハジメはありがとうといい、また準備に戻った。

夕食を食べ終わったときだった。長老の使いが呼びに来たのは。集会場には村人が集まっており、長老の言葉を待っていた。戦いではなく、非難を選んだことを告げると、村には安堵が広がっていた。イリス自身も少し安心していった。これでハジメが戦うことはない。ハジメに剣を渡したことを誤るうとしていたときだった。

「敵襲　っ！敵襲　！！」

警告を告げる鐘が鳴り響く。ざわめく集会場の中で、長老が声をかけた後、アインが飛び出していった。アインは昔からああいったタイプだった。不器用だけど面倒見のいい人。今だって、わざとふざけて村の人の不安を少しでも取るうとしていた。それにつられてか、村の男たちが集会場を出て行く。ハッと気づいてハジメの方を見る。武者奮いなのか、恐怖から来るものなのかはわからないが、ハジメは少し震えていた。これも障害の一種なのだろうか。剣の柄を握り、震えている。

自分はなんということを。そう思ったイリスは、ハジメを抱きしめていた。もう、戦わなくていい、無理はしなくていい。と声をかけていた。アリスも手を握り、言葉をかける。しばらくすると、震えがとまり、すっと立ち上がる。

「行ってくるよ」

そう言って少し悲しそうに笑う。自分はひどい女なのかもしれない。剣を持った戦士がここで行かないわけがない。言った言葉を取り消すことはできない。剣を渡した過去をなかったことにすることはできない。そう悔やみ、帰ってきたらすべて誤ることに決めたイリスは、一言、死なないでくださいと伝えた。精一杯笑顔で言えるようにしたが、涙が溢れてきた。恐怖からではなく、自分の情けなさからだった。

ハジメが集会場を出た後、私は…最低です…と泣き始めたイリスに、アリスは驚いた。いつも笑顔でいたイリスが泣くところなど、見たことがなかったからだ。

「おかあ…さん？」

不安な顔をしたアリスが手を握ってくる。アリスを抱きしめ、イリスは泣き始める。ごめんなさい、と言いながら。それがハジメに誤っているとは思わないアリスは、ただただ大丈夫、と母親を優しく抱きしめていた。

- side out -

## 冒険九日目（後書き）

一日のユニークが三桁を記録するようになりました。すごくうれしいです。

魔法に関するあやふやなところがすでにできそうな臭いがぷんぷんしますが、流し読み程度でごまかしてもらいますと、助かります。

読んでいただき、ありがとうございます。過去編もそろそろ終盤です。

## 冒険十日目

外に飛び出していったハジメは、まず指揮を取っているアインのところへ向かった。

「おう、ハジメか…戦ってくれるのはありがたいが、傷はもういいのか？」

「いえ、気にしないでください。それより、こつとの戦力と向こうの戦力は？」

情報は命にかかわる。そう考えていたハジメは自分なりの作戦を考えるため、アインにたずねた。敵はおよそ四十体。リーダーの姿が見えないところから、まずは第一波といったところか。確かに、指揮がとれているゴブリンたちであった。これに対してこちらは弓兵が十、剣士が十五、農具をもった男が十五の計四十人。数の上では今のところ互角だが、こちらは総力、あちらはまだ余裕がありそうだった。

まずいな、ハジメは聞いて直ぐに思う。数が圧倒的に違いすぎる。ハジメの予想では、第一波であの人数を送るということは、すくなくとも倍近い戦力をまだもっていると判断する。準備もしていない状態ではいつまでたえられるかわからなかった。ともかく、今はこの第一波を退けることが何より大事なことだった。

「アインさん、この戦闘が終わったら相談があるんですが…」

「なに…？わかった。とりあえずお互い生き残ろうじゃねーか！」

バシバシと肩を叩かれる。何がうれしいのかワハハと笑うアインに首をかしげながら、村の入り口にいく。百メートル先にまでゴブ

リンたちは着ていた。弓兵の射程距離はおよそ三十メートル。あと少しで戦闘開始だった。

「撃てえええ！！」

アインの掛け声とともに弓が放たれる。十人の弓兵が放った矢は何匹かのゴブリンにあたる。村の入り口にいる剣士や男たちが大きな声を上げながら敵に突っ込む姿を見て、この世界には兵法もないのだろうか、とハジメは思った。しかたなしにハジメもゴブリンに向かって走り始める。

剣を抜き、向かってくるゴブリンに切りかかる。カッターよりも間合いの長い剣は、思ったよりも早い速度で、思ったよりもあっさりとゴブリンを葬る。あれ、とハジメは思う。森であつたときはあんなにも恐怖し、苦戦したゴブリン。武器が変わったからと言ってこんなにあっさり倒せたものか。不思議に思うが、それが今はありがたかった。一体二体と倒していると、少し周りを見る余裕が出てくる。警備や村の男たちは、一体につき二人以上で対応している。幸い、ゴブリンは足が遅い。後続のゴブリンが来る頃には次の対処できており、今のところ死人は出ていなかった。アインの方は、と視線を向けると、前方に二体、後方に二体と囲まれていた。まずいと思ったハジメは走ってアインのところまで向かう。

アインの背中を切りかかろうとしていた二体のゴブリンをきりつけ、アインに背中を合わせる。助かったぜ、と言うアインに答え、二人でゴブリンを駆逐していく。時間にして十分ほどだったろうか、本人たちにはもっと長い時間が経っていたように感じたが、村を襲ってきたゴブリンを全部倒すことができた。死人もなくほっとしていた瞬間、警告を知らせる鐘がなる。

「敵襲　っ！ゴブリンです！数は…さっきの倍はいますっ！」



見晴らしのいい高台から聞こえてくる声は、男たちの気力を奪う。もうためだ…などといった声がちらほらと聞こえてくる。敵が村に来るまでもう時間がない。ハジメは考えていた策をアインに伝える。

「なるほど！それならいけるかもしれねえな！しかし、それじゃーおめえが…」

「時間がです！盾だけかしてもらえませんか？死ぬつもりはないので…」

時間にして数分もたっていなかったが、アインは結局折れ、ハジメの作戦を飲むことにした。木の盾を借りたハジメは、剣を片手に敵に向かって走り出した。後ろではアインの集合をかける声が聞こえてきた。

ハジメの提案した作戦は、「ゴブリンを村に入れる」と言うものだった。ただし、村の入り口を狭くし、少数しか通れないようにする、といった条件付で。入り口が狭くなったことで、進入してくる数を制限し、数の有利をひっくり返すという作戦であった。さらに、後ろでつかえているゴブリンに対しては弓と投石による攻撃を行う。ゴブリンリーダーによって統率が取れているとはいえ、所詮はゴブリンである。この作戦を回避する頭はないと読んだのだ。村はぐるっと周囲を木の堀で囲まれ、入り口はアインたちがいつも交代で立っている入り口一つだけである。ゴブリンの力ではこの堀は壊せない。しかし、この作戦にも弱点があった。村を固めたり、石を用意する時間がないのだ。その弱点を補うためにハジメは単独で時間稼ぎにいったのだ。

二百メートルほど先にゴブリンの群れが見える。さきほどのように隊こそ組んでるが、ばらばらに行進してきていた。ハジメにとっ

ては好都合である。時間稼ぎが目的のハジメにとって、数で来られると逃げるしかないのだ。準備が終わるとのろしがあがることになっている。それまで何とか耐えるぞと思いい剣を構え走った。

英雄願望があるわけではない。ただ、守りたい人たちができた。運動が得意でもなく、すさまじい知識があるわけでもない。25歳にして無職。毎日ゲームやテレビを見ていた男。それがハジメだった。それがこの世界に来て少しずつ変わっていった。恐怖がなくなつたわけではない。今でも立ち止まると体中が震えるだろう。身体が痛くないわけがない。今でも敵の攻撃が掠った箇所からは血が出ている。それでも剣を振るのをやめないのは、またあの笑顔が見たいから。たつたそれだけの理由だが、男にはそれだけでよかった。

二十体は切つただろうか。息が上がってきたハジメだが、身体の違和感を感じる。先ほどよりも敵の攻撃が遅く感じる。弱く感じる。それは攻撃をくらったときに確信に変わった。疲れから反応が遅れ、敵のナイフを腕にかすめてしまったのだ。また切れたか、と思ったハジメだが、赤くなっていたものの、腕は切れていなかった。

疲れを取るために少し距離をとり休すむ。赤くなつた腕を見て、防御があがったのではないか、という考えを出してみる。敵を倒すたびに経験地をもらってレベルアップしているとうゲーム風な考えだ。同時に何をばかな、と考えを否定する。ゲームではないと学んだのだ。きっと武器が錆びていたか、刃がつぶれていたのだろうと考えをまとめ、また敵に向かっていく。のろしはまだ上がらない。

あれからまた十対ほど倒したときだった。ひときわ巨大なゴブリンが出てきたのだ。手には剣と盾を持ち、体格はハジメと同じくらいだろうか、他のゴブリンよりも筋肉が発達していた。

「ゴブリンリーダーか…」

そう呟いたハジメの目の前にいるゴ布林リーダーは、怒っているように見えた。そのとき、リーダーが奇声を放つ。その瞬間周りにいたゴ布林たちはハジメを無視し、一斉に村に向かって走り出した。させるかっと思えばゴ布林を追いかけようとすると、ゴ布林リーダーが襲い掛かってきた。今までのゴ布林よりも早く、重い一撃をなんとか受ける。盾で押し返し返し距離をとる。背中を向けられやられるであろう相手に内心舌打ちをするが、ちらっと村を振り返ったときに見えたのろしが目に入る。それを見たハジメはニヤリと笑い、

「残念だったな。お前の作戦は失敗するぞ」

とゴ布林リーダーに向かって言ったのだった。

- side アイン -

村の男たちに投石用の石と入り口を塞ぐ木材を探させてすでに10分が過ぎている。本来ならすでにゴ布林たちが来ているだろうが、来ない現状を見ると、ハジメの足止めは成功しているのだろう。しかし、一人である数のゴ布林を相手にするのはランクBの冒険者でもきついかもしれない。それがアインの考えであった。ゆえに急いで準備をする。男手総出で入り口に突貫工事をし、村中の石をかき集め、高台や、一番近くの家の屋根に弓兵や投石部隊を用意する。準備が出来、のろしを上げた瞬間にゴ布林が走ってきた。

「くそっ……！ハジメっ！死ぬんじゃねえぞ……！野郎ども！来たぞっ！――！作戦はわかってるな……！」

のろしよりも早くゴブリンたちが来る。それがどんな意味なのかを知っているのはアインだけであつたが、士気を下げないためにもアインは指示を出す。入り口を制限したことにより同時に三丁五匹しか入って来れず、入ったところでゴブリンたちは待ち構えていた村の男たちに葬られていった。さらに投石や弓が決まりその数をどんどん減らしていった。

「よしっ！いいぞ！！油断するな！手の空いたものは他からゴブリンどもが入ってこないか見回るんだ！ついでに石も拾って来い！」

指示を出しながら、アインはハジメの無事を祈る。ゴブリンリーダーの姿はまだ見えない。ゴブリンリーダーはそこらのゴブリンとは違って戦闘に特化し、頭が言いだけではなく、強いのだ。それを知っているアインは、まだ見ないハジメと、ゴブリンリーダーに不安を覚えた。

- side out -

強い。戦つてみて思ったことである。ゴブリンとは違って、武器をうまく使い、こちらの攻撃が当たらない。森にいた頃のハジメなら開始五分で切られていただろう。しかしハジメもうまく盾を使い、ゴブリンリーダーの攻撃を避けていた。どちらも攻め手にかけていた。こんなとき、魔法の一発でも使えたら…と考えていたハジメだが、ゴブリンリーダーが急に奇声を上げたことに驚く。その瞬間背後から物音が聞こえたので思いつき右に飛ぶ。ころがりながら直ぐに体勢を整えるハジメだが、顔には苦痛が浮かんでいた。足に槍のようなものが刺さっていたのだ。ゴブリンリーダーの近くに走っていく二体のゴブリン。鎧のようなものも着ており、さしずめ、ゴ

プリンリーダーの近衛兵といったところか。ゲヒゲヒと汚い笑いを浮かべているゴ布林どもに切れそうになるが冷静さを取り戻す。ほぼ互角だった状況に、敵の増加、自分自身のダメージ。これはまずい。そこまで考えたが、敵はそんな時間など与えてくれず、近衛兵が突っ込んできた。痛い足を引きずりながらも二体の首を跳ねる。すぐさまリーダーが襲い掛かってくる。なんとか剣を受け止めるが、足に踏ん張りが効かず押される。盾で殴り、距離をとるが、今度は身体がふらつく。おかしい、足は確かに痛い、ふらつくほどではないはずだ、そこまで考えてまさかと思う。

## 毒

やっと気づいたかと言わんばかりにゲヒゲヒ笑う相手の姿を見て、確信に変わった。ますますまずい。さつさと倒して村まで走って解毒しない、死にいたる毒かもしれない。不安が焦りを呼ぶ。毒によるダメージもあったのか反応が遅れ、腕を少し切られる。これ以上の流血もまずい。まさに八方塞だった。

息が荒くなる。呼吸が落ち着かない。視界が悪い。足元もおぼつかない。また腕を切られた。少し深く切られ、剣を落としそうになる。盾を投げつけ、距離を取る。血が止まらない。

「まずい…早く治療…いや先に止血しないと…」

傷口を押さえながら焦る。突っ込んでくるゴ布林リーダーを何とか避けながら剣を構える。その瞬間違和感を感じる。腕が痛い。傷口を見るが、傷がなくなっていた。まさかと思い、ズボンを見る。ズボンは股間の辺りが濡れていた。

## 冒険十一日目

絶対もらしてはいない。それだけは言える。ならなぜ濡れている？なぜ傷が治っている？ぐるぐると考えが頭の中を駆け巡る。やがて一つの考えにたどり着く。

### 魔法。

治療の魔法、属性、今朝のこと……すべてが一つに繋がる。ハジメの属性は、水。畑の臭いを消したのは、土によるものではなく、水による浄化、血が止まり、治ったのは水の魔法による治療。すべてを悟るとハジメは笑い出した。突然笑い出したハジメにゴブリンリーダーは一瞬戸惑った様子を浮かべたが、ハジメが吐血したのを見て、ハジメに襲い掛かる。毒は今もハジメの身体を蝕んでいた。

襲い掛かってくるゴブリンリーダーの剣を剣で受け止める。さっきよりも重く感じる一撃をなんとか受け止めるが、立っていられない。毒が身体を回ってきたのだ。ふらつく身体に鞭を打って距離を取る。幸いだったのは、弱った獲物をなぶる趣味でもあるのか、ゴブリンリーダーが一気に襲ってこないことだった。

自分の予想を確信に変え、手を胸の辺りに持つていく。そして言霊を呟いた。

### 『解毒』

とたんに身体の調子が良くなる。同時にズボンの染みが広がっていく。それを見たハジメは嫌なほうの予想も当たっていたことに悲しくなる。そう、ハジメの魔法条件は「魔法を使うとズボンが濡れ

る」と言うものであった。少々突っ込みたい気持ちになるが、今はそんなことよりも魔法を使えるようになったことが何よりの僥倖だった。

遠距離からの攻撃が出来るようになれば、形勢は逆転する。アリスの話だと、治療や補助に特化した属性だとは言っていたが、攻撃がまったくないという話は聞いていない。水の鞭や針などを出せるのならば、これほど助かるものはない。水分は常に空気中にあるのだ。それらを集め、攻撃に使うことをイメージする。手をゴブリンに向け、言葉を放つ。

「水の鞭！」

魔法は発動しない。続けて水の針と唱えてみるが魔法は発動せず、ズボンに変化もなかった。なぜでない！？そうあせっている間にゴブリンリーダーは攻撃を仕掛けてくる。毒が治った今、ゴブリンリーダーの動きが遅く感じる。否、実際に遅いのだ。ゴブリンリーダーにもダメージがあった。毒により気がつかなかったハジメは、もう一息と思い、魔法のことは捨て、剣による攻撃を仕掛ける。しかし盾で防がれる。逆に反撃を受けてしまい腹を切られる。そう浅くも無い傷がつく。弱っている敵に油断をしていた。自分の甘さに舌打ちし、再び治療と唱える。すると、先ほどとは違い、傷は治療されていく。回復や補助しかないのだろうか。しかし、一つの仮説がハジメの頭に浮かぶ。

「傷を癒せ」

身体に手をやり、唱える。しかし魔法は発動しない。やはり！思ったハジメは直ぐに手を横なぎに振りながら唱える

『水鞭！』

手の動きにあわせ、水の鞭がしなる。まともに受けたゴブリンリーダーはわき腹に受けて吹き飛んだ。魔法を発動させた手を見て、ズボンを見て確信する。ハジメの言霊の条件、「二文字限定」であることを。

先ほどとは違って一気に半分ほどまで濡れたズボンは、治療魔法と違って攻撃魔法の消費が激しいことを表しているのが、少し重くなってきたズボンを気にしながら、立ち上がったゴブリンリーダーに視線を送る。傷も治せ、毒も治せ、遠距離攻撃も可能になったハジメはニヤリと笑い、勝利を確信する。あの盾邪魔だな、と思ったハジメは言霊を唱える。

『水刃』

円状ののこぎりの様な水の刃が弧を描いてゴブリンリーダーの盾を持っている手に飛んでいく。盾でガードするも、木の盾などあっさりと切り裂き、腕ごと持っていく。ゴブリンリーダーの叫びが広がる。剣を振りかざし走ってくる敵に対し、今度は足に目掛けて言霊を放つ。

『水刃』

ゴブリンリーダーの足が切られ、その場に崩れ落ちるはずだった。しかし、魔法は発動せず、ゴブリンリーダーの攻撃を受けてしまう。左肩から斜めに大きく切られたハジメは、痛みのショックと、出血でその場に倒れた。それを見たゴブリンリーダーは勝利の雄たけびを上げ、村へと歩みを進めた。



- side アイン -

作戦は順調だった。半分以上のゴブリンを順調に葬っていく。こちらだけが人こそいるが、死人は出ていなく、このまま順調に倒せば、村も捨てなくて済み、ゴブリンたちに怯えることもなくなる、はずだった。

「アインーっ！！ゴ布林リーダーが走ってくるぞーっ！」

高台から聞こえた声に戦っていたものたち全員が戦慄する。さらにリーダーが来たからかゴ布林たちの動きにも変化が見られた。ただただ細い入り口に突っ込んできただけだったゴ布林たちは、隊列を組み、入り口の木材に攻撃を仕掛けてきた。まずいと思ったときには遅く、入り口を狭くしていた木材が崩れる。広くなった入り口には数十対のゴ布林と、片腕のゴ布林リーダーがいた。

ハジメはどうなったのか、片腕のゴ布林リーダーがいることを考えればそれはわかりきったことだった。アインは心の中でハジメに謝り、自分に渴を入れる。

「野郎どもっ！やつは片手だっ！恐れることはないっ！！！」

少しでも士気を上げるために声を出す。すると大きな声と共にゴ布林たちが突っ込んでくる。二人で一体を相手するように指示を出す、アインはゴ布林リーダーのもとへ走っていく。自分が抑えている間に、ゴ布林全員を倒し、村人全員で相手をすればどうにかなると考えていた。しかし、アインは自分の考えが浅はかだったか、と後悔する。片腕のゴ布林リーダーなら、なんとか一人で抑えられると思っていたが、その迫力はすごかった。片腕だからこそ、か、ゴ布林リーダーの目は血走り、武器を振り上げ力任せに

振り下ろしてくる。両手で受け止めても重い一撃は、たった一回の攻防でアインの気力を奪い取る。

村人の助けが欲しいが、隊を組み始めたゴブリンに手こずってらしく、こちらに来る様子はない。まずいと焦ったアインに容赦なくゴブリンリーダーは襲いかかる。重い一撃を何度も繰り返し叩きつけてくる。徐々に防御する腕がしびれてくる。今の一撃で完全に握力をなくしたアインは盾を落とし、剣で受け止めるが、片腕で受けるには重すぎた一撃を受け、傷を負いながら吹き飛ばされる。次の一撃でいよいよとどめといったところで、炎が飛び、ゴブリンリーダーを襲う。突然の炎をくらい、叫びながら転がりまわるゴブリンリーダー。何が起こったかわからないアインは炎が飛んできた方を向く。そこには集会所に非難しているはずのアリスが、苦しそうに立っていた。

「アリス…おめえ…」

魔法が使えたのか、そう言い掛けたアインの言葉を遮るようにゴブリンリーダーの叫び声が響く。怒りからか、痛みからなのか、炎に焼かれ、さらに醜くなったその顔をアリスに向ける。アインはまじろいと感じたのか、両者の間に割って入る。まずはアインが邪魔だと思ったのか、ゴブリンリーダーは剣を振りかざし、攻撃を仕掛けてくる。しかし、先ほどの炎のダメージがあるのか、一撃の重さは減っていた。

「アリスっ！！今すぐ集会場に戻るんだっ！！！」

攻防の中、アインはアリスに向かって叫んだ。こんな小さな子供を戦場の中においていたら、イリスにも力カアにも怒られるぜ、そう考える余裕が出てくるほどには均衡を取り戻したアインは、心の

中でアリスに感謝した。しかし、アリスは、

「あとっ…一回だけ…使えるからっ…」

普段聞いたことのないような大きな声。その声から、どれほどその場にいることが恐ろしいかが伝わってくる。優しい彼女のことだ。きっと本来は魔法が使えることなど誰にも伝えたくなかったのだろう。一瞬でそれらを悟ったアインは、叫ぶ。

「俺が隙を作る！いけると思ったらいつでも撃てっ！！」

コクリとうなずく姿をアインは見えていない。隙を作ろうと必死に戦う。幸いにも相手は左腕が無い。ハジメがやったのかはわからないが、今はそこを徹底的に攻撃する。左側を攻撃されることを嫌がるゴ布林リーダーは、一度距離を取ろうと剣を振るが、ダメージを負った攻撃ではアインの追撃を振り切れない。いらだったように大きく振りかぶり、そこに隙を見出したアインの一撃を受けてしまふ。ニヤリとするアインだがゴ布林リーダーは攻撃を食らうことを予想していたのか、肉を切らせて骨を断つ。そのまま剣を振り下ろした。

切られる！そう思ったアインだが、振り下ろされる剣と、ゴ布林リーダーの姿は一瞬で吹き飛んだ。アリスの魔法によって。

「どんぴしゃだぜ…」

魔法を扱うセンスに驚くも、助けられたことに素直に感謝するアイン。魔法を食らって燃えるゴ布林リーダーはもう動く様子は無い。他のゴ布林たちもほとんど倒されていて、今、最後の一体が倒された。村人たちの勝利だった。

湧き上がる閑静のなか、ふらふらのアリスを支えるアイン。魔力を

使いすぎたのか、少し熱っぽい顔をしたアリスにすまねえな、助かったぜとアインは伝える。アリスは少しはにかむと、きよるきよると周りを見渡し、

「ハジメ…お兄ちゃんは…？」

と聞いてくる。その言葉にアインは何も言えなくなる。暗い顔をしているアインを見て、勘のいいアリスは嫌な予感がする。

「嘘…ハジメ…お兄ちゃんっ！」

大きな声を上げながらハジメを探すアリス。ふらふらとおぼつかない足取りだが、誰も止めることはできなかった。ゴブリンを倒して皆喜びの声を上げていたが、アリスの様子に気がついたのか、静かになっていった。アリスの泣くような声だけがその場に響いていた。

アリスが泣きながらハジメを探しているときだった。ゴブリンリーダーの屍骸の傍まで来たとき、ゴブリンリーダーが起き上がる。武器を振りかぶり、アリスに向かって振り下ろす。その間、誰も動くことはできなかった。一人を除いて。

痛みのないことを不思議に思っ て目を開けたアリスは、自分が優しい温かさに包まれていることに気がつく。アリスの目に映るのは、今度こそ本当に倒れたゴブリンリーダーと、自分を抱きしめるイリスの姿だった。

- side out -



## 冒険十二日目（前書き）

久しぶりの上、少し短いですが、よろしくお願いします。

## 冒険十二日目

- side イリス -

ハジメが集会場を出て、どのくらいの時間が経ったのだろうか。外から時折聞こえる叫び声は集会場の人たちに不安を与える。村の男たちが全員倒れたとき、ここに残っている人たちも蹂躪されるのだろうか、そんな考えが浮かび上がり、さらなる不安を加速させる。

ぎゅっとしがみついていたアリスの手が緩んだのを感じ、どうしたのかと見る。ハジメが外に出てから、一言も話さず、ただ俯いていたアリス。急に立ち上がったかと思うと、少し神妙な顔をしていた。まさか手伝うと言いださないだろうか、そんな不安が頭をよぎるが、アリスの言葉に力が抜ける。

「…トイレ…行きたい」

一瞬なんのことかわからなくなるが、直ぐに安堵し、少し気持ちが軽くなる。我が家のお姫様はずいぶん肝が据わっているわね、と思いながらも一緒に行こうと立ち上がると

「一人で…大丈夫…」

と言われたので、親離れの年なのかしら、と少し寂しく思いながらも座りなおした。トイレはこの建物の裏口にあり、外に出ることはない。安心して使えるのだが、集会場にはたくさんの人がいる、今もトイレ待ちで並んでいる人は多い、時間がかかるだろう。

「本当に大丈夫？」

と改めて聞くと、うん、ありがとうといってトイレに向かうアリス。その途中で一度振り返り、何かを言うが、聞き取れなかった。

時間にして十分ほど経っただろうか、少し遅い気がする。アリスは思い、そんなに人が並んでいたのかとトイレに向かう。すると、トイレに並んでいる人数は五人ほどで、今出てきた人はアリスではなかった。列にも姿が見当たらない。一瞬ということかわからなくなり、パニックになるイリス。

急いで自分たちのいたところに戻るが、やはりアリスの姿は見当たらない。大声で叫びアリスを探すが見つからない。他の人たちが何事かとイリスの方へやってきて、事情を聞くと集会場の中を探すことになった。

さらに十分が過ぎてもアリスは見つからなかった。イリスは振り返ったときのアリスの姿を思いだす。少し悲しそうな顔で口を動かしていた。あの口の動きはなんだったか……

ふと、隣のスペースの兄弟が喧嘩をしている光景が目に入る。お兄ちゃんが手をだしたようで、弟に申し訳なさそうに謝っていた。

「ごめんなさい」

瞬間、イリスは入り口に向かって駆け出す。周りがとめる声も聞かず、ひたすらに走った。

外は家が燃えているのか、かがり火よりも明るい炎が見え、燃える匂いがした。

あの子が無事でありますように。それだけを祈り走る。金属と金属がぶつかる音が聞こえてくる。村人の歓声だろうか、声が大きく



聞こえてきたとき、視界が開けた。泣きじゃくるアリスと止んでいく歓声。アリスの姿を見てほっとし、それから怒ろうとアリスに向かって駆け出す。その瞬間、アリスの後ろで何か大きな影が起き上がる。

背中の熱さと胸の中の温かさが入り混じり、イリスはその場に崩れ落ちる。燃えるように背中が熱い。たぶん切られたのだろう。しかし、自分はアリスを守れた。それだけが誇らしかった。

「ア…リス…嘘…ついちゃ…だめじゃ…な…い」

最後の力を振り絞り、アリスを怒る。しかし、顔は微笑しかでなかった。ああ、なんて愛おしい子なんだろう。なんて優しい子なんだろう。アリスの心の葛藤をすべて理解したイリスは彼女がどれほど悩み、辛い決断をし、この場にいるのか、それを考えていた。

「お…か…あさん…？」

状況が飲み込めていないのか、アリスが呆然と見ている。ああ、最後くらいは笑顔のアリスを見たかった。そう思いながら暗くなっていく視界にただ何もできないでいる。

「お母さん！お母さん！」

「イリスッ！！」

アインの声が聞こえる、しかし、その姿はもうイリスの目には映らなかった。そういえば、ハジメさんはどうしたのだろう。そんなことを考えながら、だんだんと意識がなくなってくるのを感じた。ああ、この子の成長した姿を見たかったな、どうか村の人やハジメさんがいつまでもこの子のために

身体が熱い、痛い、一体どうなっている…そこまで思ってたハジメは起き上がる。その瞬間身体に激痛が走る。思わずうめき声を上げる。しかしその痛みで何があったかを一瞬で理解したハジメは考察する。

『水刃』が発動せず、ゴブリンリーダーに切られた。ここは判る。しかしなぜ突然魔法が発動しなくなったのか、二文字と言う条件は見たいしていたはずである。少し考えたが、村から上がる炎が見え、痛みには鞭をうち、立ち上がる。自分は一体どのくらい気を失っていたのだろうか、村は無事なんだろうか。痛みのためゆっくりとしか歩けないことにいらだつ。そのとき、ふとズボンが濡れていることに気がつくが、膝下まで乾いていることに気がつく。一回目の『水刃』を使った時点で、足首まで濡れていたはずなのに…とそこまで考えたハジメは気づく。

「そうか…もう濡れるところがなかったのかっ！」

『二文字の言霊』を使い、魔法を使うと、『ズボンが濡れ』、『ズボンが濡れきるまで魔法を使える』

これがハジメが出した結論だった。自分の結論の正しさを証明するために、もう一度『治療』と唱えてみる。傷はふさがり、痛みが消えていく。ズボンに目をやると、スネのあたりまで濡れていた。そこで魔力の消費が多い『水刃』を使おうと思ったが、この先何があるかわからないと思い、不必要な魔力消費を避けることにした。

痛みがなくなったことで村へと走る事になったハジメだが、もう直ぐ村と言うときに歓声上がる。村のみんながとうとうやったのか、と思ったハジメは歩みを緩める。歓声に混じって聞こえる泣き声がある気がするのだが、村までまだ距離があるために気のせいかと思う。

ここまで走ってきて思ったことが、全体的に身体能力が少し上がっている。これについてもまた考察する必要があるなと思ったところで悲鳴のような声が消えてきた。

「お母さん!!」

「イリスッ!!」

ハジメはすでに全力で走っていた。現場に着いたときには、アリスと、アインと、血の池にかかるようにして横たわるイリスがいた。その周りでは村の男たちが目を伏せ、顔を背けていた。ゴブリンはもうまわりにいないのに、喜ぶ人はだれもいなかった。

「なにがあつたっ!!」

叫ぶようにして声をだすハジメにアインが驚いたように声を出す

「ハジメ!お前生きてっ

」

「アインさんっ!」

まるで別人のようになったハジメに気おされるアイン、ことの終始をハジメに説明するとハジメはすでに意識がなく、だんだんと呼吸が小さくなっていくイリスを見た。

「お母さんっ!お母さんっ!!」

ハジメが隣にいることにも気がつかないアリスを見て、ハジメは一つの決心をし、アインに少し頼むといって、イリスの家まで走ります。そこで一つの実験をして、自分の考えがただしかったことを証明し、もどってくる。

「ハジメ、おめえ一体何を…」

アインの疑問にも答えず、今は急ぐ。泣き叫ぶアリスに呼びかけるが、まるで気がつかないので、ごめんと謝り、頬を叩く。やっと気がついたアリスはハジメに抱きつき泣き始める。

誰もがイリスの死を待つしかない状況でハジメだけが諦めていなかった。

「命の恩人をこんなところで死なすわけにはいかないしな…」

そう呟いて、もう一度アリスに謝り、引き離す。イリスを抱き上げ、手ごろな台の上につつ伏せに寝かせ、そして呟いた。

『治療』

ハジメの手から優しい光が放たれる。見る見るなくなっていくイリスの傷口を見て、誰もが驚きの表情を浮かべる。あらかたの傷がなくなったことを確認すると、今度は『解毒』を唱える。念のためである。この段階でズボンはずでに膝上まで濡れていた。

水の属性は治療に特化したものである。しかし、ハジメは、次の魔法がどれほどの効果があり、どれほどの魔力を消費するのかわからなかった。それどころか、発動するかも怪しい魔法だった。しか

し、唱えないわけには行かず、また、今ならまだ間に合うと思ったからだ。

『蘇生』

呟いた瞬間、まばゆい光が辺りを包み込む。よし、発動したと思つたのもつかの間、自分でもわかるほどズボンの濡れ方が半端じゃなかった。あつという間にスネを超え足首まで到達した瞬間、ガンッ！と何か鈍器で頭を殴られたような衝撃がハジメを襲った。

魔力切れである。しかし、まだイリスは息を吹き返していない。ここから先は命を削つての魔法である。それを抑えるために身体は緊急処置として気を失おうとしている。しかしハジメはそれに耐えながら魔力の放出を続ける。

トクン、と心臓の鼓動が聞こえた気がしたとき、ハジメはとうとう気を失った。その後聞こえた大きな歓声を聞くこともなく。

## 冒険十二日目（後書き）

基本、ハッピーエンド主義ですから・・・。

## 冒険十三日目（前書き）

今回から（ ）を使って心の中の言葉を表現してみました。

色々試しているので何かあれば気軽に感想に書き込んでもらえます  
とうれしいです。

## 冒険十三日目

身体全身の痛みを感じ、ハジメは目が覚めた。全身筋肉痛の様に身体が痛む。はて、そんな運動したっけな、と考えたところでゴブリンとの死闘がフラッシュバックする。

「そうだった！ゴブリンッ！！　　っう…」

急に上半身を起こしたことにより体中に痛みが走る。筋肉もそうだが中也痛む。筋肉が、骨が、臓器が悲鳴を上げてるような、これまでに感じたことのない痛み悶絶する。魔力を酷使した代償だと気づいたのは直ぐだった。なぜ魔力を酷使したのかを思い出したからだ。

（イリスさんはどうなった…、助かったのか？村は？どうなってる…）

焦るハジメだが、身体が痛くて動けない。歯がゆい思いをしているときにドアが開けられた。桶のような入れ物とタオルもって入ってきたのは今一番気にしているイリスだった。部屋に入ってきて扉を閉める。振り返ってハジメの姿を見た瞬間持っていたものを落とした。桶からこぼれた水は床一面に広がり、びしょびしょになる。大丈夫ですかと声をかけようとしてハジメはぎよっとする。その瞬間には温かい体温に包まれ、肩は桶の水とは違う水で濡れていた。

「お母さん？」

床に水をこぼした音で来たのだろうアリスが部屋に入ってきた。イリスはこんな状態で話せないなので、おはようとアリスに声をかけ



る。その瞬間アリスも泣きながら抱きついてくるのだからハジメは正直焦った。

こんなに心配してくれるということはそれなりに危なかったのかもしれない。迷惑をかけたな…と思いつつも今まさに命の危険を感じているハジメ、全身が悲鳴を上げているところに女性とはいえ大人一人、子供一人の体重がかかっているのである。しかし、痛いのでいてくださいとは言えない。それなりに空気の読める男であった。

ハジメがこの苦しみから解放されるのはもうしばらく後だった。

二人が落ち着いてきたころ、あの戦いの後、ハジメが気を失ったからのことを聞かされた。

ハジメが倒れてからすぐにカディナが呼ばれ、イリスと共に診療所まで運ばれたらしく、ハジメがイリスにしたことを聞いた瞬間カディナは顔を青くしたという。ともかくカディナが治療したのだが、魔力酷使の影響が強く、正直助かるかわからないといわれたそうだ。カディスはアリス以外の人を追いついて、ハジメの治療にあたり、その間アリスはイリスにずっとついていたとのこと。カディナの診断だとイリスはもう大丈夫といわれていた。

今夜が峠と言われたハジメだが、カディナの懸命の治療により一命をとりとめた。次の日にイリスは目覚め、村中の人喜びに溢れていた。すべての事情を聞いたイリスはハジメを家に運んでもらい、看病していた。その間、アリスはもう一度イリスにしかられていた。それから一週間が経ち、現在にいたること。

「一週間も寝ていたのか…」

ハジメにしてみたら昨日のことうようだった。あの熱気、ゴブリンリーダーとの死闘。すべてがまだ残っていた。そう思っていた矢先に腹の音になる。そういえば戦闘から何も食べていないな、と。そう思ったら気になることができた。

「一週間、何も食べてないのに…どうやって俺は栄養を取っていたんですか？」

点滴などもちろんないであろうこの世界で一週間も寝込んでいられるのが不思議に思ったハジメはイリスに質問してみた。イリスの説明によると「治療の水」と呼ばれる水がありカディナからもらったとのこと。高いらしいが村の人たちが少しずつお金を出してハジメのために買ったことを聞くと申し訳ない気持ちと嬉しさでいっぱいになった。もう一つ気になってどうやってその水を取ったのかを聞くと、秘密ですと振り返り、ご飯にするからアリス、手伝ってくれる？と部屋を出て行ってしまった。後ろから見えた耳は真っ赤だったことはハジメには見えなかった。

窓から外が見える。もうお昼だろうか、遠くで木材を運ぶ村の人が見える。恐らくは村の復興のためだろうか。イリスが用意してくれた痛み止めが効いてきたのだろうか、痛みが少し和らいだ気がする。すこしベッドから出てみるが直ぐにふらついてベッドにしりもちをつく。

「一週間も寝てたからな…生まれたての小鹿だな。まったく」

と呟き、身体をほぐしつつ軽くストレッチをする。後で村の人やカディナにお礼を言わなければと呟き、ふと考え付く。魔法で痛みが取れるのではないか、と。しかし、魔法を使いすぎて体が痛むのにそこに魔法を使うのは…まずくね？と思ひ直したハジメは取り合

えず入念にストレッチに励み、キッチンに向かった。

キッチンでは二人の親子が料理をしており、ハジメの姿を見かけると、もう大丈夫なんですかと声をかけてきた。はい、と答えたハジメは手伝いますといったがもちろんやんわりと断られ、手持ち無沙汰になる。まだ時間がかかるように見えたので裏の畑に行くことにする。ハジメが寝ている間、アリスかイリスが恐らく水をあげていたのだろう畑はとんでもないことになっていた。

「なんだ…これ？」

根菜であるポテモの葉はすでに収穫が出来るほど大きく、アップリの木もメートルはありそうなほど伸びていた。それぞれ本来は一ヶ月から二ヶ月かかる植物である。植えてから十日も経っていないのにこの成長はやはり魔法のせいだろうか。

取り合えず水を撒こうと思うが井戸から組んできていないことを思い出すと急にめんどくさくなり、魔法を使おうと考える。人差し指を上に向け、水の球を作るイメージをして呟く。

『水球』

小さな水の球が出来上がり、どんどん大きくしていく。程よい大きさになったところで畑の上に移動させ弾けさせる。満遍なく畑に水が降り注ぎ、魔法が使えるようになったことが夢じゃなかったことを再確認したハジメは自分の条件も再確認することになる。

『水球』は水を集めるだけの魔法だったのでそんなに魔力を使わないようだが、そのせいで逆に「それ」が本物に見えた。

（これは…まずいですよ…）

不用意に使うものではないなと思ったハジメは自分の部屋の窓まで走り窓から家に入って着替えた。それから何事も無かったかのようになりキッチンに戻ると、丁度いい具合に準備が終わったようであるなどご飯を食べる。少し豪華な食事は回帰お祝いだそうだ。

食事中何度かイリスと目が合うがなぜかそらされ、自分は何か下のだろうかと思う。イリスの様子を伺うと少し顔が赤くなっている。熱だろうか、思いつつも急にフラッシュバックしたように自分が倒れたときの様子が思い浮かぶ。

魔法を使う　ズボンびしょ濡れ　ハジメの条件と知る人はいない  
前科有り

「はっ！？ちちちちちち…ちが…ちがうんやあゝゝ！！」

絶叫したハジメはなぜか関西弁だった。

- s i d e　イリス -

ハジメさんが意識をなくしてもう一週間が経つ。桶に水を入れ、タオルの準備をする。すでに日課となりつつあるハジメの身体を拭くためである。年は離れているとはいえ、男性の身体を拭くのは抵抗が少しあったが村の、自分の命の恩人である。しかも二度目とあればいやでも何でもなく、むしろお願いしてでもお世話したいほどである。準備しながらイリスは意識が戻った頃のことを思い出していた。

アリスの泣き顔を最後に見て、次に目が覚めるとカディナさんの診療所だった。私は助かったのだろうかと思っていると手に温かさを感じる。見るとアリスの手だった。ずっと握っていたのだろ。

疲れてベッドに寄りかかり眠っていた。しばらく優しくアリスを撫でてみると、

「気がついたのかい？」

と、少し疲れた様子のカディナが顔を出した。慌てて治療のお礼をすると、私は何もしていないとことの始終を聞かされた。聴き終わった瞬間にハジメの様子を聞いたが、カディナは苦笑しながら今峠を越えたよと伝え、疲れたから寝るといつて出て行った。恐らくはずっと治療をしていたのだろう。

それにしても、イリスは思う。二度も命を救われた。二度目は文字通り命を戻してくれた。自分を代償にしても。カディナの話だと、命は取り留めたが、いつ目覚めるか判らないという。明日にでも目覚めるかもしれないし、一生目が覚め中かもしれない。なら、自分がすべきことは一つと心に決めたとき、握っていた手かもぞもぞと動き出す。寝ぼけ眼でイリスを見ているアリスにおはようと声をかける。しばらくぼーっとしていたアリスだが急に泣きながら抱きついてきた。イリスも何も言わずに強く抱きしめた。

しばらく抱き合っていたイリスだが、ふと思い出し、アリスをしかり始める。嘘をついたこと、黙って戦場に行ったこと等。怒られながらも笑顔のアリスを見てイリスも起こる気をなくしたのか、もう一度抱きしめる。それからハジメのことをアリスに伝える。同時にこれからのことも。

翌日、カディナと相談した結果、ハジメは家で治療することになった。治療といっても世話をするだけだが、村の人がハジメのために用意してくれた「治療の水」を飲ませたり、身体を拭いたりとなかなか大変な作業だった。しかし三日もすると慣れてきて、生活の一部になっていた。

アリスはあれから魔法に関する本を読むことが多くなった。恐らく自分の力不足を嘆いているのかもしれない。今も恐らく本を読んでいるのだろう。アリスの部屋の扉をちらりと見、そんなことを考える。向かいにある扉をノックせずにあける。すこし礼儀がないようだが、ハジメは眠っているので無用だと思ったのだ。扉を閉め、振り返ったとき、持っていた桶を落としてしまう。

ずっと寝ていたハジメが起き上がっていた。驚きと喜びが湧き上がり、言葉にならなかった。床にこぼれた水も気にしないでハジメを抱きしめる。よかった。ただよかったと。

こぼれた水の音を聞いてきたであろうアリスもハジメに気がつき、泣きながら抱きつく。嬉しくて、しばらくそうしていた。

それからハジメにこれまでのことを説明した。ハジメは、一週間も寝てたのかと呟く。そのとき、ハジメのお腹からぐうぐうという音が聞こえる。少し恥ずかしそうになるハジメを見て、苦笑するイリス。ご飯の支度をしなくちゃと思っていたとき、ハジメから

「一週間、何も食べてないのに…どうやって俺は栄養を取っていたんですか？」

と聞かれ、「治療の水」のことや村の人たちがお金を出してくれたことを伝えた。すると少し思案した顔になったあと、どうやって水を飲ませたのかを聞いてきた。その瞬間、どうやって飲ませていたのかが頭に思い浮かび、真っ赤になっているであろう顔を隠すため振り向き、秘密と答え、アリスと一緒に料理の準備をするというのでそくさと部屋を出てくるイリス。

準備している間にも少し顔が赤く、ときどき変な母親に首をかし

げるアリスだった。

料理が出来たところにハジメも丁度テーブルに着く。ハジメに少し違和感を感じたが、みんなでおいしくご飯をいただいた。ハジメを見ているとまた思い出してまともに顔を見れないでいると、

「はっ！？ちちちちち…ちが…ちがうんやあゝゝ！！」

と、急に叫びだした。走って部屋に戻るハジメを首をかしげながらアリスと見送っていたが、ご飯の片付けが終わる頃、何事も無かったようにハジメがキッチンに現れ、カディナや村の人にお礼を言いたいと言ってきた。

もしかしたら昔の記憶がもどり錯乱したのかもしれないと思ったイリスは、ここは何事も無いように接するのがいいかしらと思い、出かける用意をした。

イリス、空気の読める女であった。

- side out -

## 冒険十三日目（後書き）

感想、批評、おかしい点（これはたくさんあるw）、誤字などがあればお知らせください。



## 冒険十四日目（前書き）

時間があつたので忘れないうちに投稿。

## 冒険十四日目

また忘れたい過去が増えたハジメは、イリスに村の人にお礼をいに歩き回ることを伝えると、アリスも交えて三人で行くことになった。一番最初に向かったのは長老の家。道中村の人に声をかけられねぎらわれた。英雄なんて言葉が聞こえたのは何かの間違いだろう。

長老の家に着くなりお礼を言われた。村を捨てずに済んだのはお主のおかげだと言われたのだ。どうやらアインがことの顛末を長老に伝えたらしく、なにやらちょっとどころではない誇張が入り、村を命がけで一人で救った男になっているらしい。んなばかなっと思いつつも話はいつの間にかゴ布林達を追いつた祝いと村の復興、ハジメの快気をまとめて祝う宴の話になっていた。もう否定はできなかった。宴は今夜行うことになった。

帰り道、危険な作戦をとったことをねちねちと笑顔で攻められる苦行に耐えながらカディナと診療所についた。

「おや、目が覚めたんだね……」

ハジメを見ると少し驚いたカディナだったが、柔らかい笑顔で迎え入れてくれた。軽い診察を受け、起きてからのことを聞いてくる体中に痛みがあることを伝えるとやはり魔力の使いすぎだといわれた。どんな魔法を使ったのか、などと詳しく聞かれたがハジメは正直詳しく言いたくなかったので（特に条件）、あいまいにかわしていた。わりとあっさり引いたカディナに拍子抜けしたが、後ろでイリスがカディナを睨んでいたのでそこら辺は察した。夜に宴があることを告げ、診療所を後にした。

家についてからはイリスは仕事に、アリスは部屋で読書になった。ハジメは何か手伝えないかと言ったが、休んでくださいといわれ、部屋で休んでいた。

ふと鞘に収まった剣が目に入る。アリスの父親が手入れしていたものらしき剣、正直この武器がなければあそこまで戦えてなかっただろう剣を抜く。

「げっ…これはひどい…」

恐らくあのときからそのままであろう剣は、ゴブリンの血が着き、臭いを放っていた。夕方まですることは決まったと思い、剣を研ぐ為に石を探す。手入れをしていたというくらいだから物置にあるだろうとゴソゴソと漁っていたら研ぎ石らしい石を見つけた。剣を研いだことはないが、包丁くらいは研いだことのあるハジメは同じ要領だろうと井戸で水を汲み、剣を洗い、研ぎ始める。丁寧に、丹念に。

一時間ほど熱中していると、いつの間にか横にはアリスが座って作業を見ていた。

「アリス…ごめんな、熱中してて気がつかなかったよ」

「ん…」

少し休憩といい、手を洗ってアリスの横に座る。いいの？とアリスが聞いてくる聞いてくるので、大体は終わったからと答え、部屋に戻る。部屋に戻って二人でぐてっとしてしているとアリスが口を開く。

「ハジメ…お兄ちゃん、魔法使ってた…」

まだ慣れない「お兄ちゃん」にむず痒さを覚えるが、そういえば魔法のこと何も話してなかったなと思い、一応師匠？にあたるアリ

スには説明することにした。魔法のこと、属性のこと。二文字という条件。そして。

「あー…あとな、魔法条件なんだが…なんだ…そのー…」

言いよんどんでいると首をかしげてこちらを見るアリス。言うべきか、言わざるべきか、悩むハジメ。しかし、魔法を使えることを意を決して伝えてくれたアリスに対して自分が秘密を抱えるわけにはいかないと思い、思い切って伝えた。あと何度かあった「誤解」を解いた。

話を聞いたアリスはハジメはポカンとした顔をしていたが、納得させるために『水球』を使って見せる。すると股間が少し濡れる。『水球』を大きくすると濡れ具合も大きくなってくる。

「ちなみにただの水だからな」

誤解させないように釘を刺しておく。ちゃんと確かめたのだ。『水球』を消すとアリスは何やら思案顔で俯いていた。しばらくするとアリスは顔をあげ、自分なりの見解を説明してくれた。

曰く、魔力があがると、同じ魔法に付き、濡れ方が変わってくること。

曰く、ズボンを変えるとまた魔法が使えるということはある意味魔力は無限に近いということ

曰く、このことはよっぽど信頼できる人でないと言わないほうがいいこと

など、ハジメが思ってもいなかったことを伝えてきた。正直こんな恥ずかしい条件だれにも言いたくなかったが、魔力が無限にある

かもしれないというのは少し嬉しかった。が、そのたびにズボンをいちいち変えないといけないのはどうかと思ったハジメだった。

剣を磨く作業を終え、部屋に戻るとイリスが帰ってくる。イリスを出迎え、しばらく話していると、そろそろ宴の準備が始まるので行きましようと言われ、三人で向かうことにした。

村の広場に付いた瞬間大きな歓声がハジメたちを向かえる。

「おおおおおおおつ！！！」

「来たぞっ！村の英雄だ！！」

「生きてたかコノヤロー！！」

「アリスたん：ハアハア」

危険な思想も混じっていた気もするが、突然のことに驚くハジメ、後ろでは成功ですね、とイリスが微笑んでいた。イリスの説明によるとさつき出かけたのは宴の準備で、ハジメを驚かすためにこの計画をしていたとか。

あれよあれよと壇上のような席に運ばれ、宴のオープニングの挨拶をすることになった。

かつて無い熱気に当てられ、少し気持ちが高ぶっていたハジメは、

「皆さんが俺のために「治療の水」を買ってくれたことは聞いています。この場を借りて御礼を言わせてください。ありがとうございます。この通り元気、といっても全身筋肉痛でまともにうごけませんが、五体満足です。ともかく、ゴブリンの脅威は去りました。今夜は大いに盛り上がりましょう！乾杯！」

その瞬間、村はまた歓声に包まれる。村の人からもみくちやにされ、御礼を言われ、快気を喜ばれ、ハジメは宴を楽しんだ。しばらく

くして落ち着いた頃、アインがハジメに近寄ってくる。

「おう！兄弟！大変だったな！」

「アインさん！そう思ったなら助けてくださいよ」

「ガッハッハ！俺が入らないことが助けることになると思ってくれよ！」

すでに酔っているのか、元からなのか、アインは上機嫌にバシバシと背中を叩いてくる。正直言っただけだが、我慢するのがハジメであつた。

「俺からも礼を言わせてくれ。死人が出なかったのも、ゴブリンを倒せたのもおめえさんのおかげだ。ありがとう」

素直にお礼を受け取り、アインとしばらく飲み食いしていると、カディナが寄ってくる。後ろにはイリスとアリスが付いてきていた。

「やあ、英雄殿」

と、茶化しながらカディナは上機嫌に肩を組んでくる。かなり酔っているようだった。後ろで苦笑いしているイリスが手を合わせている。前の被害者であつた。

「英雄殿、私はね、本当に感謝しているんだよ？二度も！二度もイリスを救ってもらってえ！イリスはね？そりゃもう娘のように可愛がつてきたのに最近冷たくって……」

となぜかイリスが最近冷たくなった話になってきたところで気がつく。「娘と思って」ずいぶん若く見えるカディナだが、いったいいくつなんだろう。ハジメの見解では、イリス（25）、アリス（

10)、アイン(32)、カディナ(30)であるが、娘と思う年齢ならば、もしかして…四十代後半だったりするのだろうか、なんということだろう。異世界にきて一番驚くかもしれないと思ったとき、

「あらあゝ？英雄殿はいける口だねえ？ほら、おねえさんと飲もうよあゝ」

と今度は絡んできた。いける口も何も元の世界にいたときも酒はたまにはのんでいた。むしろ祝いの席で飲まないなど言ってもいられなかった。のだが、

「だめですっ！カディナさん！ただでさえハジメさんは病み上がりなんですよ？たくさん飲ませちゃだめですよ！それからハジメさん！いくらお酒が飲めるようになる年齢を過ぎたからと行っても未成年なんですから！たくさん飲んじゃだめですよ？病み上がりなんですし…」

とイリスが雷を落としてきた。カディナは反省してるのかしてないのか、ちえーと言って引き下がるが、ハジメはどうしても気になることがあり、引き下がらなかった。

「あのゝイリスさん、お酒の飲める年齢って？」

「え？ああ、そうでしたね。ハジメさんは違う土地からきていましたね。こちらでは一六歳から飲めますよ」

「そうなんですか…ちなみに成人は？」

「ええ、それまで違うんですか？成人は十八歳からですよ？」

「…イリスさんは俺をいくつだと思ってます？」

「えっ…その…一六歳か、十七歳くらいかな、と…」

その瞬間ハジメはがつくりとうなだれる。外国で日本人が年よりも若く見られるのは知っていたが、自分がまさか未成年に思われていたなんて…。と。今考えれば確かに思い当たる節がいくつかある。もし歳が近い男としてみていたのなら、あんなに無用心に抱きついたりしないだろう。なるほど、とハジメは思う。

「あの…ハジメさん…？」「イリスさんっ！」「はひい！」

突然顔を上げて名前を呼ばれたことに驚くイリスだったが、次の言葉が人生で一番驚いたのかもしれない。

「俺は、二十五歳ですよ…」

集瞬、時間が止まり、

「……エエエエエエ！」「……」

と村中に絶叫が響き渡った。

イリス、アリス、カディナ、アイン、近くにいた村の人たちが各々で「いや、でも」などと混乱していた。それぞれが、そんなばかなっ！嘘でしょ？などと言ってきたので本当ですと答えていると、カディナが

「酔いが覚めたわ…」

とどこかに行ってしまった。それからイリス、アリス、アインの年齢を知ることができた。イリスが二十八、なんと年上だった。アリスは十二とニアピン。アインはなんとイリスと同じ年だった。驚きである。しかし空気の読める男ハジメ、誰にも何も言わず、そうなんですか、と済ませた。予断だが、カディナの年齢は誰も知らない



かった。

夜遅くまで続いた宴はつつがなく終わり、それぞれの帰路についた。変える頃にはそれなりに酔っていたハジメは、帰ってベッドに入るなりそのまま眠ってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3767s/>

---

ただし、使うとズボンが濡れる。

2011年7月24日17時19分発行